

基本計画書

基本計画								
事項		記入欄				備考		
計画の区分		学部設置						
フリガナ設置者		カザワカクインダクイガク 学校法人 金沢学院大学						
フリガナ大学の名称		カザワカクインダクイガク 金沢学院大学 (Kanazawa Gakuin University)						
大学本部の位置		石川県金沢市末町10の5番地						
大学の目的		金沢学院大学は、教育基本法及び学校教育法に従い、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的応用能力及び道徳的教養を豊かにして、建学の精神「愛と理性」の伸長を指標に、人格を陶冶し、創造性と実行力により文化日本の建設に貢献し、進んで世界の平和と人類の福祉に奉仕する有為な人材を育成することを目的とする。（学則第1条より）						
新設学部等の目的		教育は未来を創る創造的な営みである。AIによるロボット、バイオテクノロジーなどの飛躍的發展により、2045年ごろには人間の能力と社会が根底から覆される「シンギュラリティ（技術的特異点：Technological Singularity）」が発生する可能性すら予測される新しい時代を迎えようとする今、希望ある未来社会の構築のためには、教師がこの新時代に対応した専門的力量をもつことが不可欠である。このことを踏まえ、本学部では、次のような人材を養成する。 ・広い教養に支えられた高度な教育実践力をもつ教師・保育者（幼稚園教諭・保育士）の養成 ・知的世界に冒険者・先駆者として子どもを導くことのできる教師・保育者（幼稚園教諭・保育士）の養成 ・企画者・構想者・学習者・共創者・先導者・支援者・援助者として学校教育をリードできる教師・保育者（幼稚園教諭・保育士）の養成 ・自他の精神的自由を大切に、自己変革・自己成長への勇気をもつ教師・保育者（幼稚園教諭・保育士）の養成 これらの養成する人材像に基づき、以下の能力習得を目的とする： ・多様な人々と異見や対立を乗り越え、課題に立ち向かい、新たな解や智を共創できるための基本的技能としての共創型対話力の習得 ・地球社会の一員としての当事者意識・多文化共生のマインドの育成をもち、今ある現実の課題の解決のみでなく、未来を見据える（バックキャスティング）思想の涵養 ・多様な知識・能力・理解・技能・経験などを統合・総合し、新たな解や知恵を生起させる共創力の習得						
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	教育学部 [Faculty of Education]	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	石川県金沢市末町10の5番地
	教育学科 [Department of Education]	4	70	3年次 5	290	学士（教育学） [Bachelor of Education]	令和4年4月 第 1 年次 令和6年4月 第 3 年次	
	計	4	70	5	290			
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）		文学部 教育学科（廃止）（△70） （3年次編入学定員）（△5） ※令和4年4月学生募集停止 （3年次編入学定員は令和6年4月学生募集停止）						

教育課程	新設学部等の名称		開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
			講義	演習	実験・実習	計					
	教育学部教育学科		81科目	44科目	12科目	137科目	128単位				
教員組織の概要	学 部 等 の 名 称			専任教員等					兼 任 教 員 等		
				教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新設分	教育学部 教育学科			6人 (6)	5人 (5)	5人 (5)	2人 (2)	18人 (18)	0人 (0)	15人 (14)
					()	()	()	()	()	()	()
		計			6人 (6)	5人 (5)	5人 (5)	2人 (2)	18人 (18)	0人 (0)	15人 (14)
	既設分	文学部 文学科			8 (8)	3 (3)	14 (14)	0 (0)	25 (25)	0 (0)	24 (24)
		経済学部 経済学科			7 (7)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	44 (44)
		経営学科			5 (5)	2 (2)	4 (4)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	32 (32)
		経済情報学部 経済情報学科			6 (6)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	23 (23)
		芸術学部 芸術学科			7 (7)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	28 (28)
		スポーツ科学部 スポーツ科学科			7 (7)	3 (3)	2 (2)	4 (4)	16 (16)	2 (2)	19 (19)
		栄養学部 栄養学科			8 (8)	3 (3)	1 (1)	1 (1)	13 (13)	5 (5)	25 (25)
		基礎教育機構			2 (2)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	6 (6)	0 (0)	0 (0)
					()	()	()	()	()	()	()
		計			50 (50)	23 (23)	29 (29)	5 (5)	107 (107)	7 (7)	195 (195)
	合 計			56 (56)	28 (28)	34 (34)	7 (7)	125 (125)	7 (7)	210 (209)	
教員以外の職員の概要	職 種			専 任		兼 任		計			
	事 務 職 員			80人 (80)		7人 (7)		87人 (87)			
	技 術 職 員			5 (5)		1 (1)		6 (6)			
	図 書 館 専 門 職 員			1 (1)		0 (0)		1 (1)			
	そ の 他 の 職 員			1 (1)		1 (1)		2 (2)			
	計			87 (87)		9 (9)		96 (96)			
校 地 等	区 分		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用		計		◆ 共用する他の学校 金沢学院短期大学 (必要面積:3,200㎡) ◆ 運動場用地(専用) 借用面積:1,386㎡、期間:25年 ◆ その他(共用) 借用面積:919㎡、借用期間10年 1,978㎡、借用期間21年(女子学生寮敷地)		
	校 舎 敷 地		0 ㎡	82,501 ㎡	0 ㎡		82,501 ㎡				
	運 動 場 用 地		35,590 ㎡	10,612 ㎡	0 ㎡		46,202 ㎡				
	小 計		35,590 ㎡	93,113 ㎡	0 ㎡		128,703 ㎡				
	そ の 他		31,610 ㎡	9,639 ㎡	0 ㎡		41,249 ㎡				
	合 計		67,200 ㎡	102,752 ㎡	0 ㎡		169,952 ㎡				
校 舎			専 用	共 用	共用する他の学校等の専用		計		金沢学院短期大学と併用 (必要面積:3,650㎡)		
			16,288㎡ (16,288㎡)	16,984㎡ (16,984㎡)	5,107㎡ (5,107㎡)		38,379㎡ (38,379㎡)				
教室等	講義室		演習室	実験実習室	情報処理学習施設		語学学習施設		大学全体(一部、金沢学院短期大学と共用)		
	50 室		13 室	43 室	13 室 (補助職員 3人)		3 室 (補助職員 2人)				
専 任 教 員 研 究 室			新設学部等の名称			室 数					
			教育学部 教育学科			18 室					

図書・設備	新設学部等の名称		図書 〔うち外国書〕冊	学術雑誌 〔うち外国書〕種		電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点		
	教育学部 教育学科		105,095〔15,134〕 (100,363〔15,110〕)	15〔0〕 (15〔0〕)	0〔0〕 (0〔0〕)	2,129 (1,925)	7,725 (7,708)	74 (74)			
	計		105,095〔15,134〕 (100,363〔15,110〕)	15〔0〕 (15〔0〕)	0〔0〕 (0〔0〕)	2,129 (1,925)	7,725 (7,708)	74 (74)			
	図書館		面積 2,755 m ²		閲覧座席数 335 席		収 納 可 能 冊 数 229,914 冊		大学全体		
体育館		面積 3,391 m ²		体育館以外のスポーツ施設の概要 屋 内 練 習 場 テ ニ ス コ ー ト							
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	大学全体	
		教員1人当り研究費等		300千円	300千円	300千円	300千円	—	—		
		共 同 研 究 費 等		900千円	900千円	900千円	900千円	—	—		
		図 書 購 入 費	1,500千円	1,500千円	1,500千円	1,500千円	1,500千円	—	—		図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費（運用コストを含む）を含む。
		設 備 購 入 費	6,000千円	6,000千円	6,000千円	6,000千円	6,000千円	—	—		
	学生1人当り納付金	第1年次 1,320千円	第2年次 1,120千円	第3年次 1,120千円	第4年次 1,120千円	第5年次 千円	第6年次 千円				
	学生納付金以外の維持方法の概要			資産運用収入、雑収入 等							
既設大学等の状況	大 学 の 名 称		金沢学院大学								
	学 部 等 の 名 称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所 在 地	
	文学部		年	人	3年次 人	人		1.08		石川県金沢市末町10の5番地	
	文学科		4	180	8	736	学士(文学)	1.16	平成27年度		
	教育学科		4	70	5	290	学士(教育学)	0.98	平成30年度		
	経営情報学部				3年次			-		同上	
	経営情報学科		4	—	—	—	学士(経営学)	-	平成28年度		
	経営ビジネス学科		4	—	—	—	学士(経営学)	-	平成18年度		
	経営システム学科		4	—	—	—	学士(経営学)	-	平成18年度		
	経済学部				3年次			1.12			
	経済学科		4	80	5	330	学士(経済学)	1.00	令和2年度	同上	
	経営学科		4	60	5	250	学士(経営学)	1.28	令和2年度	同上	
	経済情報学部				3年次			1.12		同上	
	経済情報学科		4	70	—	280	学士(経済情報学)	1.12	令和2年度		
	芸術学部				3年次			1.14		同上	
	芸術学科		4	70	2	284	学士(芸術学)	1.14	平成28年度		
	人間健康学部				3年次			-			
	スポーツ健康学科		4	—	—	—	学士(スポーツ健康学)	-	平成23年度	同上	
	健康栄養学科		4	—	—	—	学士(栄養学)	-	平成28年度	同上	
	スポーツ科学部				3年次			1.14		同上	
	スポーツ科学科		4	150	10	620	学士(スポーツ科学)	1.14	令和3年度		
	栄養学部				3年次			1.03		同上	
	栄養学科		4	80	5	330	学士(栄養学)	1.03	令和3年度		

大学院経営情報学研究科	経営情報学専攻 (博士前期課程)	2	10	—	20	修士(経営情報学)	0.40	平成11年度	同上
	経営情報学専攻 (博士後期課程)	3	4	—	12	博士(経営情報学)	0.25	平成17年度	(サテライト教室:石川県金沢市南町3番2号南町中央ビル) 同上
	大学院人文学研究科 人文学専攻 (修士課程)	2	5	—	10	修士(文学)	0.10	平成20年度	同上
	大学院スポーツ健康学研究科 スポーツ健康学専攻 (修士課程)	2	5	—	10	修士(スポーツ健康学)	0.50	平成27年度	同上
大 学 の 名 称		金沢学院短期大学							
学 部 等 の 名 称		修業 年限	入学 定員	編入学 定 員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	所 在 地
		年	人	年次 人	人		倍		
幼児教育学科		2	50	—	100	短期大学士 (幼児教育学)	0.72	平成30年度	石川県金沢市末町10番地
現代教養学科		2	50	—	100	短期大学士 (教養)	0.97	平成28年度	同上
食物栄養学科		2	60	—	120	短期大学士 (栄養学)	0.88	平成17年度	同上
附属施設の概要		該当なし							

教育課程等の概要														
（教育学部教育学科）														
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
教養科目	教職入門Ⅰ	1前	1				○			1	2	1		
	教職入門Ⅱ	1後	1				○			1	2	1		
	教職入門Ⅲ	2前	1				○			1	2	1		
	教職入門Ⅳ	2後	1				○			1	2	1		
	コンピュータ基礎演習	1前	2				○				1			
	日本国憲法	1後	2			○								兼1
	哲学	1後		2		○								兼1
	社会学	1後		2		○								兼1
	地理学	2後		2		○								兼1
	体育理論	1前	1			○					1			
	体育実技	2後	1					○				1		
	英語Ⅰ	1前	2				○		1	2				
	英語Ⅱ	1後	2			○			1	2				
	小計（13科目）	—	14	6		—			1	4	4	2		兼4
専門科目	教職基幹科目	教職論	1前	2		○					1			
		教育原理	1後	2		○			1					
		教育心理学	1後	2		○			1					
		教育経営概論	2前	2		○			1					
		教育課程論	2前	2		○				2				オムニバス
		教育方法・技術論	2後	2		○					1			
		小計（6科目）	—	12	0	—			2	2	2			
	小学校・中学校教諭専門科目	道德教育の指導法	3後	2		○				1				
		特別活動の理論と実践	3後	2		○			1	1				オムニバス
		総合的な学習の時間の指導法	3後	2		○			2	1	1			オムニバス
		生徒・進路指導論	3前	2		○				1				
		初等教科教育法（国語）	2後	2		○			1	1				オムニバス
		初等教科教育法（社会）	2前	2		○			1					
		初等教科教育法（算数）	2後	2		○								兼1
		初等教科教育法（理科）	3前	2		○			1					兼1
		初等教科教育法（生活）	3前	2		○								
		初等教科教育法（音楽）	2前	2		○					1			
		初等教科教育法（図画工作）	3前	2		○					1			
		初等教科教育法（家庭）	3後	2		○								兼1
		初等教科教育法（体育）	3後	2		○					1			
		初等教科教育法（英語）	3後	2		○				1				
		英語科教育法Ⅰ	2通	4		○								兼1
		英語科教育法Ⅱ	3通	4		○								兼1
		小計（16科目）	—		36	—			3	2	4			兼4

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門科目	幼稚園教諭・保育士専門科目	保育原理		2		○					1				
		保育課程論		2		○				1					
		子ども家庭福祉		2		○				1					
		社会福祉		2		○				1					
		社会的養護Ⅰ		2		○				1					
		保育者論		2		○					1				
		保育の心理学		2		○			1						
		子ども家庭支援の心理学		2			○		1					兼1	
		子どもの理解と援助		1			○		1					兼1	
		子どもの保健		2		○								兼1	
		子どもの健康と安全		1			○							兼1	
		子どもの食と栄養		2			○							兼1	
		子ども家庭支援論		2		○				1					
		保育内容総論		1			○			1					
		保育内容（健康）		2		○						1			
		保育内容（人間関係）		2		○				1			1		
		保育内容（環境）		2		○							1		
		保育内容（ことば）		2		○			1						
		保育内容（表現）		2		○					2				
		保育内容演習（健康）		1			○					1			
		保育内容演習（人間関係）		1			○			1			1		
		保育内容演習（環境）		1			○						1		
		保育内容演習（ことば）		1			○		1						
		保育内容演習（表現）		1			○				2				
		幼児理解と教育相談		2		○			1						
		乳児保育Ⅰ		2			○					1			
		乳児保育Ⅱ		1			○					1			
		社会的養護Ⅱ		1			○			1					
		子育て支援		1			○							兼1	
		幼児・児童文化		1			○			1					
		表現演習Ⅰ		1			○				1				
		表現演習Ⅱ		1			○					1			
	小計（32科目）		—	50		—			2	2	3	2		兼5	
	教科専門科目	国語（書写含む）		2		○			1						
		社会		2		○			1						
		算数		2		○								兼1	
		理科		2		○			1					兼1	
		生活		2		○									
		音楽基礎		2		○					1				
		図画工作		2			○				1				
		体育Ⅰ		2			○					1			
		体育Ⅱ（リズムダンス）		1			○					1			
		家庭		2		○								兼1	
		小学校英語		2		○				1					
	小計（11科目）		—	21		—			3	1	2	1		兼3	
	英語専門科目	英語学概論		2		○			1						
		英語文法論		2		○			1						
		英語文法演習		2			○		1						
		英米文学概論		2		○				1					
		英米文学史		2		○				1					
		英米文学講読		2		○				1					
		英米文学演習		2			○			1					
		言語習得研究		2		○				1					
		英語表現Ⅰ		2		○			1						
		英語表現Ⅱ		2		○			1						
		English Writing		2		○								兼1	
	小計（11科目）		—	22		—			1	2				兼1	

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門科目	グローバル人材の育成	国際理解教育概論	1前	2		○			1						
		多文化理解概論	3前	2		○			1						
		文化比較論	1後	2		○				1					
		地球市民論	3後	2		○						1			
		グローバル対話論	2後	2		○			1						
		生物多様性概説	3前	2		○									兼1
		海外英語教材比較研究	3前	2		○				1					
		小学校英語教育概論	2後	2		○				1					
		英語プレゼンテーション	3後	2			○								兼1
		英語コミュニケーションⅠ	2前	2		○				1					
		英語コミュニケーションⅡ	2後	2		○				1					
		多文化共生社会と保育	4前	2		○				3	3	2			
	小計（12科目）		—	6	18		—		1	4	3	2		兼2	
	新課題対応力の育成	ICT活用教育概論	1後	2		○					1				
		デジタル教材開発	3後	2		○					1				
		ICT活用とインクルーシブ教育	3前	2		○			1		1				オムニバス
		「チーム学校」と学校組織マネジメント	2前	2		○			1						
		地域協働と学校の役割	3前	2		○			2	1	1				オムニバス
		スクールソーシャルワーク論	3後	2		○				1					
		特別支援教育総論	2前	2		○			1						
		教育相談	1後	2		○			1						
		障がい児保育	3前	2		○			1						
		障がい児教育	2後	2		○			1						
	小計（10科目）		—	6	14		—		3	2	2				
	実習関連科目	学校インターンシップ	1後	2				○	1		1	1			
		保育インターンシップ	1後	2				○			2	1			
		保育実習Ⅰ（保育所）	3通	2				○			2	1			
		保育実習Ⅰ（施設）	3通	2				○		1	1	1			
		保育実習Ⅱ	3通	2				○			2	1			
		保育実習Ⅲ	4通	2				○		1	1	1			
		保育実習指導Ⅰ	3通	2			○			1	1	1			
		保育実習指導Ⅱ	3通	1			○				2	1			
		保育実習指導Ⅲ	4通	1			○			1	1	1			
		教育実習Ⅰ（幼）	3後	2				○		1	2	1			
		教育実習Ⅱ（幼）	4前	2				○		1	2	1			
		教育実習指導Ⅰ（幼）	3前	1			○			1	2	1			
		教育実習指導Ⅱ（幼）	4前	1			○			1	2	1			
		教育実習（小）	4前	4				○			2	1			
		教育実習指導（小）	4前	1			○				2	1			
		教育実習Ⅰ（中）	4前	2				○	1	1					
		教育実習Ⅱ（中）	4後	2				○	1	1					
		教育実習指導Ⅰ（中）	4前	1			○		1	1					
		教育実習指導Ⅱ（中）	4後	1			○		1	1					
		保育・教職実践演習（幼）	4後	2			○			1	2	1			
		教職実践演習（幼・小・中）	4後	2			○			1	3				
	小計（21科目）		—		37		—		1	3	5	2			
	セミナー・卒業研究	教育学基礎セミナーⅠ	3前	1			○		4	5	5	2			
		教育学基礎セミナーⅡ	3後	1			○		4	5	5	2			
		教育学セミナーⅠ	4前	1			○		4	5	5	2			
		教育学セミナーⅡ	4後	1			○		4	5	5	2			
		卒業研究	4通	2			○		4	5	5	2			
	小計（5科目）		—	6			—		4	5	5	2			
合計（137科目）		—	44	204	0	—			6	5	5	2		兼18	
学位又は称号		学士（教育学）	学位又は学科の分野			教育学・保育学関係									

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
教養科目から必修14単位、専門科目から必修30単位を含む128単位以上を修得すること。 なお、上記必修科目のほか、教員免許及び保育士の資格を取得するためには、以下の通り単位を修得すること。	1 学年の学期区分	2 期
○保育士資格 「保育原理」「保育課程論」「子ども家庭福祉」「社会福祉」「社会的養護Ⅰ」「保育者論」「保育の心理学」「子ども家庭支援の心理学」「子どもの理解と援助」「子どもの保健」「子どもの健康と安全」「子どもの食と栄養」「子ども家庭支援論」「保育内容総論」「保育内容指導法（健康）」「保育内容指導法（人間関係）」「保育内容指導法（環境）」「保育内容指導法（言葉）」「保育内容指導法（表現）」「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」「社会的養護Ⅱ」「子育て支援」「幼児・児童文化」「表現演習Ⅰ」「表現演習Ⅱ」「体育Ⅱ（リズムダンス）」「障がい児保育」「保育実習Ⅰ（施設）」「保育実習Ⅰ（保育所）」「保育実習指導Ⅰ」「保育・教職実践演習（幼）」の全ての単位を修得し、さらに、「幼児と健康」「幼児と人間関係」「幼児と環境」「幼児と言葉」「幼児と表現」「幼児理解と教育相談」のうち6単位以上と、「保育実習Ⅱ」および「保育実習指導Ⅱ」の2科目3単位もしくは「保育実習Ⅲ」および「保育実習指導Ⅲ」の2科目3単位を修得すること。 ○幼稚園教諭一種免許状 「保育内容総論」「幼児と健康」「幼児と人間関係」「幼児と環境」「幼児と言葉」「幼児と表現」「保育内容指導法（健康）」「保育内容指導法（人間関係）」「保育内容指導法（環境）」「保育内容指導法（言葉）」「保育内容指導法（表現）」「幼児理解と教育相談」「教育実習Ⅰ（幼）」「教育実習Ⅱ（幼）」「教育実習指導Ⅰ（幼）」「教育実習指導Ⅱ（幼）」の全ての単位と、「保育・教職実践演習（幼）」または「教職実践演習（幼・小・中）」のどちらかを修得すること。 さらに、「保育者論」「保育原理」「保育課程論」「幼児・児童文化」「表現演習Ⅰ」「表現演習Ⅱ」「体育Ⅱ（リズムダンス）」「障がい児保育」から、10単位以上を修得すること。	1 学期の授業期間	1 5 週
○小学校教諭一種免許状 「道德教育の指導法」「特別活動の理論と実践」「総合的な学習の時間の指導法」「生徒・進路指導論」「初等教科教育法（国語）」「初等教科教育法（社会）」「初等教科教育法（算数）」「初等教科教育法（理科）」「初等教科教育法（生活）」「初等教科教育法（音楽）」「初等教科教育法（図画工作）」「初等教科教育法（家庭）」「初等教科教育法（体育）」「初等教科教育法（英語）」「国語（書写含む）」「社会」「算数」「理科」「生活」「音楽基礎」「図画工作」「体育Ⅰ」「家庭」「小学校英語」「教育相談」「教育実習（小）」「教育実習指導（小）」「教職実践演習（幼・小・中）」の全ての単位を修得すること。 ○中学校一種免許状（英語） 「道德教育の指導法」「特別活動の理論と実践」「総合的な学習の時間の指導法」「生徒・進路指導論」「英語科教育法Ⅰ」「英語科教育法Ⅱ」「英米文学概論」「英語表現Ⅰ」「英語表現Ⅱ」「多文化理解概論」「英語学概論」「英語文法論」「英語コミュニケーションⅠ」「英語コミュニケーションⅡ」「英語プレゼンテーション」「教育相談」「教育実習Ⅰ（中）」「教育実習Ⅱ（中）」「教育実習指導Ⅰ（中）」「教育実習指導Ⅱ（中）」「教職実践演習（幼・小・中）」の全ての単位を修得すること。	1 時限の授業時間	9 0 分

授業科目の概要			
（教育学部教育学科）			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	教職入門Ⅰ	高等教育機関で学修することと、教育学を専攻することの意味と方法を理解することを目的とする。「生徒」から「学生」になり、高校までに学んだ知識を基礎として、更に社会に飛躍するためには、学生生活全般における意識と行動の転換と、高い目標に向かうために自己を律する姿勢、そして教職員や学友と意義ある交流を深めることが重要である。本授業は、全体講義、クラス単位、個別指導の3形式からなり、一人ひとりが教職員や学友と相互理解を深めながら、大学における自己の在り方を探究する。	共同
	教職入門Ⅱ	教育学を専攻し、教職への具体的な資質・能力を高める方法を理解し、身に付けることを目的とする。教職志望の「学生」として教職に就くために必要な姿勢や具体的な努力の実際を方法論とともに学修していく。同時に、学生生活全般における継続した意識と行動の転換と、高い目標に向かうために自己を律する姿勢を維持し、自らが設定した目標を達成するための努力を達成することを実践していく。本授業は、教職に就くために必要な資質・能力を理解し、教壇に立つために必須となる教員採用試験についての理解を深める。その上で、教職に就くための具体的な努力の方策を、自ら立て実践していく。全体講義、クラス単位、個別指導の3形式から、一人ひとりが教職員や学友と相互理解を深めながら、教職に就く自己を明確にしていく。	共同
	教職入門Ⅲ	教職に向けた具体的な努力を継続しつつ、より実践に即した学びを身に付けることを目的とする。実際の学校現場・保育現場を想定した学びを深めるとともに、教師の役割・授業実践等についての理解を深める。特に、指導法等の学びを深めながら、各学校段階等の幼児・児童・生徒らの発達段階を考慮した教授方法の違いについても理解を深める。実際の学校現場を想定した教師の立場に立つという意識のもと、自らの教師像への理解を深め、実践的な力を培うための理解を深めていく。	共同
	教職入門Ⅳ	教職入門のまとめとして、自分自身が目指す教師像・保育者像を教育・保育実践の場を想定して説明することができる。またその実現のために必要な今後の具体的な努力について説明することができることを目的とする。さらに、自分自身の教師像・保育者像をもとに、3年次以降のゼミ選択のための自分自身のテーマや関心領域の見識を深める機会とする。教師・保育者としての専門性を自分自身が目指す教師像・保育者像から考え、3年次以降のゼミ学習に備えつつ、教職志望学生として必要な資質・能力を高めていく。	共同
	コンピュータ基礎演習	コンピュータ活用の最も基本となるものは、各種デバイスの仕組みとその扱い方であり、これについて確認および練習をする。続いて、現代における主要な利用形態がインターネットを通じたものとなるので、その仕組みやルール（マナー）、また、セキュリティに関する問題点等を具体的にに取り上げ、利便性や効用に伴うリスクに対処する方法を学ぶ。次に、教育活動に必要とされる実務や学習における作業を担うオフィス・ソフトウェアに対する理解を得るために、目的に応じた処理方法を検討しながら、円滑に利活用できるようにする。	
	日本国憲法	この授業では、憲法の基本的人権を中心に、個人の権利と社会の関係など私達の生活と法との関わりを理解した上で、今日的な問題を検討するなど、法律の基礎知識の習得とそれに基づいた法的思考能力及び問題解決能力の育成を目指す。	
	哲学	あなたの世界は物からできているのか、それとも事実から成り立っているのだろうか。開講者はその世界は事実から成り立っていると考えている。そしてその事実を事実たらしめているのは言語であると考えている。なぜならば、私は無尽蔵と言ってもよいほどの情報の（元となる）シャワーを浴びながら、それらの大部分を無意識に無視し、そしてそのごく一部分を自分の経験として自分の世界の中に取り込んでいく。その〈経験化〉には、ことばを用いているのだ。このような〈世界—言語〉観もあることを学ぶことによって、絶対的な価値を有するにも関わらず、言語に成し得ない非常に重要なモノ（カタカナ表記に注意）があることをあなたに了解させることを目標とする。それは倫理、芸術、宗教などの領域に踏み込むことになる。	

教養科目	社会学	社会学が対象とする領域は広範にわたるが、この講義では「社会」を考えることの歴史性と意味に留意しつつ、主要分野につき研究史を概観するとともに、身近な問題と関連づけて近年の動向を扱う。この際、文化人類学や心理学といった隣接領域も意識しつつ、特に注目すべき観点として再帰性、ディズニーランド化、動物化、あるいはネット社会、監視社会、リスク社会、コントロール型社会等の問題を取り上げる。また並行してAI、IoTその他の新技術が社会に及ぼす影響についても考える。講義を通じて受講者が社会学の全体像について概略を理解し、各自の関心領域についてより深い探究へと進む手がかりを得ることを目標とする。	
	地理学	地理学とは、「人間の環境を、空間的視点から捉え、その構造を明らかにする」学問である。「人間の環境」が研究対象であり、「空間的視点」が研究方法であり、「構造を明らかにする」ことが研究目的である。「環境」とは、自然環境・人文環境（社会・経済・文化）など、そこに暮らす人々の生活に影響を及ぼす全ての事象であり、「空間的視点」から「構造を明らかにする」とは地域の特徴を他地域との差異から明らかにし、類型化することである。そしてその差異の原因を明らかにしてゆくことである。 本授業では、様々な事例を学び、実際にその方法を用い、身近な地域の特徴を明らかにしながら、地理的研究方法を習得することを目的とする。	
	体育理論	健康な身体を形成するには、適度なスポーツや運動が必要である。スポーツ・運動を楽しく行えるには運動技能の習得も不可欠である。そのための方法について、実技と関連させつつ、理論的に論じる。	
	体育実技	多くの仲間と楽しみながら様々なスポーツを実践することで、コミュニケーションスキルや社会性の向上を図る。また、個人でできる簡単な運動から集団スポーツまで幅広く行うことで、生涯にわたって運動を実践していく態度を養う。	
	英語Ⅰ	この授業では、学習者にとって身近な話題や場面を通して、英語の4技能（Listening、Speaking、Reading、Writing）を身につけるための基礎として不可欠な英文法を、基本から確実に修得する。同時に、英文法の基礎的な知識を用いて、英文パッセージを読み、英文の読解力を身につける。また、ペアワークやロールプレイなど「参加型」のアクティビティを通して「使える」英語力の向上を目指す。	
	英語Ⅱ	英語Ⅰに引き続き、この授業では、学習者にとって身近な話題や場面を通して、英語の4技能（Listening、Speaking、Reading、Writing）を身につけるための基礎として不可欠な英文法を、基本から確実に修得する。同時に、英文法の基礎的な知識を用いて、英文パッセージを読み、英文の読解力を身につける。また、ペアワークやロールプレイなど「参加型」のアクティビティを通して「使える」英語力の向上を目指す。	
専門科目	教職基幹科目	教職論	授業では小学校を中心に幼稚園～中学校教諭になることの意義や教員の役割、教育公務員としての身分と服務、職務内容に関する知識を得た上で、現在の教師に求められる資質能力とこれからの社会における教師の役割を踏まえながら、自らの教師としての適性や意欲についての省察を深める。その上で、各自の理想とする教師像を明確にし、その実現に向けた学習計画と将来設計を行う。 教師には、子どもたちのみならず地域住民や教育関連機関との協働が必要であり、それらの関わりの中で日々自らのスキルアップを図り、その責務と役職に応じて活躍できる能力を身に付けていく必要がある。本授業は、これから求められる教師の資質・能力についての理解を深めるとともに入職後、教師として成長する際に認識しておくべき基礎理論と心構えについて修得する。 教師の職業能力の発達(職能発達・職能成長)と、教師の職業的社会化のメカニズムに関して学び、主体的に学び続ける教師になるための基礎素養を修得することを目的にする。

専 門 科 目	教 職 基 幹 科 目	教育原理	本授業は、「教育とは何か」という根本問題を中心に、人間形成の基礎的原理を理解するために、教育活動を維持推進していく内容と構造を明らかにする。教師と生徒の教育関係を成立させる基本的条件を解きほぐし、教職に必要な人間性と専門的な技量・知識を身に付ける重要性について理解できるようにする。さらに現実の教育に対する公正な視野を持つために、教育の歴史及び思想に関する基礎的知識を諸外国の範例を踏まえつつ幅広く学ぶことを通して、今日の教育問題に積極的に向き合い対応することができる、教職に関する基本的姿勢の育成を目的とする授業展開を進めていく。 具体的には、以下の四つの視点から講義を進めていく。1、教育の意味をその語源から理解し、教育の基本理念を把握するために、教授—学習という教育活動の本質的意味について説明する。2、教育成立の条件を西洋及び日本の主要な教育思想の歴史的展開から読み解くとともに、今後の教育のあり方について前向きに取り組む姿勢と知見を身に付けるように促す。3、学校教育を支えている多様な要因が存在することを理解し、国家・地域社会・家庭と学校の関係性及びその性格と役割について、具体的な事例を取り上げながら教職の魅力と課題について考える。4、いじめ・不登校等々の学校及び教師が直面している喫急の諸問題を取り上げ、その解決策を多様な資料を駆使して考察する。	
		教育心理学	初めて「教育心理学」を学ぶ学生諸君にとって、「教育心理学は児童・生徒の『こころ』を理解し、効果的授業を進める道具となる学問」である想像するかもしれない。教育現場で心理学を扱う対象は、教える人（教師）、教えられる人（児童生徒）、教える内容と（教材）と方法（教育方法）であるといえるかもしれない。 しかし、教育心理学は、「科学としての法則を追及する」側面を持ち、教育の実践に役立つものでなければならない。教育心理学で記述された理論は、教育現場で実証的な仮説検証を行った研究が、その出発点となり、発展してきている。我々学習者は、子どもの発達を常に念頭に置き、子どもたちの発達や教育に寄り添いたいものである。これまで学んできた教育場面（保育所や学校）と関連づけながら学ぶことを理想とする。	
		教育経営概論	教育は社会的諸条件の中で成立しているため、さまざまな観点から関心と呼び論議され、教育改革や学校改善の取組も活発である。本授業では、大きく変貌しつつある社会の諸相をふまえて、わが国における教育、学校、教員の現状や動向について、教育経営学の観点から考察する。	
		教育課程論	主な目的は、次の4点である。第1は、教育課程（カリキュラム）の歴史と現状を、前近代の学校との対比において考察し、当該分野の基礎知識を修得することである。第2は、教育課程の変遷（学習指導要領、教科書等を手掛かりに）を概説し、教育課程の編成原則・諸問題を抽出することで、今日的な教育課程の仕組みを把握することである。第3は、教科・教材の特質を考慮した編成について考究し、具体的に教育課程を編成できるようになることである。最後に第4として、学校種を考慮した、連続性のある教育課程編成を明らかにし、長期的展望に立った教育の在り方を理解することである。これらを通し、教育課程に関して、主体的に携われる教育者になることを目指す。 （オムニバス方式/全15回） （7. 木村昭雄/11回） 教育課程・カリキュラムの歴史と最新の実態を学び、具体的な教育課程編成を行える教師になることを、最終的な到達目標と位置付ける。特に、小学校と中学校に焦点を当て、普遍性と校種別の異同・特殊性を理解し、義務教育段階の教育課程の基本的な考え方を探究する。これを通して、学校間の連続性を考慮した教育課程編成の確立を目指す。 （9. 米川（平石） 泉子/4回） 幼稚園及び保育園、認定こども園の保育内容の充実と質の向上に資する保育の計画と評価、法的根拠についてや保育課程の編成と指導計画の実質的な運用方法について具体的に理解し、保幼小の連続性を意識したカリキュラム、地域・保護者との連携について理解する。	オムニバス
		教育方法・技術論	教育方法の基本原則と意義を知るとともに、その基礎にある授業について、特に「よい授業とは何か」について理解するとともに、授業を展開するための様々な方法や技術を知り、実践に役立てることができるようにする。教育方法の歴史的な経緯を踏まえつつ、一斉学習と個別学習、協働学習の在り方など今日的な教育方法の課題について、幼稚園・小学校・中学校のそれぞれの実践事例を検討し、その特性を明らかにする。その上で、次期学習指導要領のキーワードであるアクティブ・ラーニング（主体的・対話的な深い学び：AL）についての知識と実践的な技術を身につけるとともに、ALを促進するICT（情報通信技術）および情報機器の利活用についての実践的な知識と技能を身につける。	

小学校・中学校教諭専門科目	道徳教育の指導法	学校教育における道徳性の育成の意義や「特別な教科」道徳の位置付けを明確にし、どのような道徳授業が子どもの道徳性の育成にとって効果的か、実践例と実践の理論的背景を通して検討することによって、道徳の具体的指導法や教材作成についての理解を深めるとともに道徳授業の実践力を養う。	
	特別活動の理論と実践	本授業では、まず理論的解説の視点から、特別活動の今日的意義を明らかにし、基礎的知識として、特別活動のとらえ方、歴史的変遷、教育課程における位置づけ、特別活動の特質やデューイの「なすことによって学ぶ」という方法原理、さらに指導と評価等の基本的観点について学習させる。また、実践的指導力の養成として、特別活動の共通目標原理である「自主的・実践的態度」の育成を目指した先進的な活動事例を取り上げ、特別活動の楽しさと重要性・困難性を小集団演習を通して体験的に学ばせる。また、小集団演習やディスカッションの場面を多く取り入れ、さらに、毎時間のグループ検討レポートの作成などを通して、特別活動の現状と課題を踏まえた実践的指導力を身に付けることを目指す。 (オムニバス方式/全15回) (2. 米澤利明/7回) 教育課程における「特別活動」の教育課程上の位置付けや今日的意義について学習指導要領を解説し理解を深める。また、デューイの「なすことによって学ぶ」という方法原理の解説や指導と評価の一体化等について、実際に単元開発・教材作成・模擬授業・評価を行うことによって、学校の特色や子どもの実態、地域の様子などに対応しながらカリキュラム開発できるための技能を身に付ける。 (7. 木村昭雄/8回) 特別活動の実践における内容、「学級活動(1)(2)(3)」「児童会活動」「クラブ活動」「学校行事」について、カリキュラム・マネジメントの実際や学習指導案の作成、さらに模擬授業を通して実践的指導力を身に付けることを目指す。	オムニバス
	総合的な学習の時間の指導法	「総合的な学習の時間」の具体的な実践事例を紹介しながら、各学校がどのような課題を持ち、それをどのような方法で「総合的な学習の時間」として教育計画を立案し学校全体で取り組んだのかについて理解し、それをもとに議論しながら「総合的な学習」の意義や効果的な方法についての見識を深める。 また、実際に「総合的な学習の時間」のカリキュラムプランを作成し、その中の一つを模擬授業をすることによって、実際の学校現場で活用できる具体的技能を身に付ける。 (オムニバス方式/全15回) (1. 多田孝志/2回) 国際理解教育の概念、構成要素について解説する。グローバル時代、多文化共生社会の人間における国際理解教育の役割を説明する。国際理解教育の実践事例を紹介し、学校における国際理解教育の具体的な進め方を習得させる。 (14. 山口真希/5回) 現代社会に求められる資質・能力と「総合的な学習の時間」との関連の理解を深める。特に、ICT機器の活用を前提とする先進的な実践事例を踏まえた単元開発・教材作成さらに模擬授業・評価を行うことによって、学校の特色や子どもの実態、地域の様子などに対応しながらカリキュラム開発できるための技能を身に付ける。 (2. 米澤利明/3回) 教育課程における「総合的な学習の時間」の位置付けや今日的意義について学習指導要領や実践事例をもとに解説し理解を深める。特に「環境」分野の内容についての学習方法、さらに実際に単元開発・教材作成・模擬授業・評価を行うことによって、学校の特色や子どもの実態、地域の様子などに対応しながらカリキュラム開発できるための技能を身に付ける。 (7. 木村昭雄/5回) 教育課程における「総合的な学習の時間」の在り方に関する見識を深める。学校や地域、クラス、学習者の実態に即した課題設定の立て方や、教材研究、学習指導案の作成方法や授業展開、発問法など細部について実践的に検討し、教師として、教育実習生として相応しい知見と技術を修得する	オムニバス
	生徒・進路指導論	現在の生徒指導は、社会の急激な変化と価値観の多様化、生活の私事化の広がりなどを背景として、多くの困難点を抱えている。昨今、青少年の社会性・協調性・道徳性・共感性の乏しさが指摘され、その育成には、教育関係者が等しく戸惑いを覚えている。この講義では、まず、今の社会状況の中で生徒指導の持つ意義と果たすべき役割について確認する。続いて一人ひとりの児童・生徒のパーソナリティーの理解に立った指導の進め方、問題行動の要因の理解と対処の仕方、保護者・地域・関係機関と連携を持って青少年の健全育成に努める方策等についての識見を深める。あわせて、進路指導の理論と方法を学び、児童・生徒が生き方を確立し、将来において自己実現できるように、児童・生徒の資質向上ならびに態度・能力形成を指導・援助する教師としての実践的能力の伸長を図る。	

小学校・中学校教諭専門科目 専門科目	初等教科教育法（国語）	小学校国語科の目標・内容の構成について学習指導要領により学ばせる。関連資料を活用し、学習過程の明確化、言語活動や伝統的な言語文化の重視など、改善の要点について認識させる。現職教師の作成した学習案を検討し、また国語科教科書教材を活用し、教材分析、学習指導案の作成方法の基本を周知させる。読む・書く・話す・聞く、また、古典、書写について、分担して学習案を作成させ、模擬授業を実施し、相互批評、教師の解説等により、国語教師としての実践力を習得させる。	共同
	初等教科教育法（社会）	社会科教育の理念・目標について、関連文献や具体的な現場の授業例などを通して理解し探究することを通して、社会科教育にかかわる課題を見出し、その上で、教材開発、授業設計、実践、振り返りの過程を体験し、カリキュラム開発や授業づくりのために必要な実践力を養う。	
	初等教科教育法（算数）	学習指導要領の算数科指導に関わる内容について理解した上で、教材研究の方法を身につけ、単元の指導計画や指導案の作成方法を身につける。また、示範授業参観や模擬授業実施を通して、自ら授業を行う能力を高め、よりよい算数科授業を創ろうとする態度を養う。	
	初等教科教育法（理科）	まず、小学校に理科という教科が位置づけられている背景や目的等について、小学校学習指導要領や同解説をもとに概説する。この小学校理科の特徴の理解を踏まえて、実際の理科授業を行うために必要となる学習内容の捉え方や観察・実験の技能や指導法について理解するとともに授業シミュレーション（模擬授業）を通してカリキュラム編成の理解、学習指導案の作成の仕方、学習評価の方法など授業実践における教材研究及びスキル等の修得を目指す。	
	初等教科教育法（生活）	小学校生活科の授業を着実に進めることができる力量ある小学校教員の育成をめざして、生活科の授業構成、指導計画、学習方法、教材・教具、評価計画など、指導にかかわる基礎的・基本的な事項を学ばせていく。また、学習指導案の作成などを通して、今日の学校教育における生活科の存在意義を認識させるとともに、模擬授業や検証授業などを取り入れながら、教員としての実践的な能力・態度を確実に身に付けさせていく。	
	初等教科教育法（音楽）	小学校音楽科における音楽科教育の意義、目標、指導内容について理解を深めるために、学習指導要領をもとに学ばせる。また、音楽科教育の諸活動（表現・鑑賞）を通して教材研究および指導法について理解させる。「表現」領域の内容については、歌唱・器楽・音楽づくりからさらに具体化してそれぞれの活動ごとに演習させる。「鑑賞」領域の内容については、基本的な考え方から具体事例をもとに指導法を学ばせる。指導目標を達成するための教材研究や学習指導案作成の仕方を理解させる。さらに、授業の計画や進め方、評価方法など、講義や実技、学習指導案作成等の演習を通して実践的に理解させ、まとめとして、グループによる20分程度の模擬授業を行わせる。	
	初等教科教育法（図画工作）	小学校の図画工作科の目標や内容及び教科の特性への理解を深め、教科の役割を理解する。造形遊び、絵、立体の表現方法と、鑑賞の方法を学ぶことで、図画工作の学習指導要領の内容についてより具体的に理解できるようにする。また、年間指導計画の立案を行い、学習指導案を書き、模擬授業実践を行うことを通して教科の実践的な指導力を身に付ける。	
	初等教科教育法（家庭）	家庭科を学ぶ子どもの姿と教師のかかわり方をイメージした上で、小学校家庭科教育の意義、目標、内容について学習指導要領により理解する。これらを活かして、題材表、学習指導案の作成や模擬授業を通じて、具体的・実践的に家庭科指導の在り方について学習し、子どもの学習効果を高める授業作りを考え、小学校家庭科教師としての資質・能力を習得させる。	
	初等教科教育法（体育）	小学校学習指導要領「体育」の内容の理解し、学年に応じた各運動領域の内容やこれからの体育授業のあり方を踏まえながら、単元の指導計画や学習指導案の立案方法を身につける。また、様々な視点から「なぜ教えるのか」「何を教えるのか」を考えながら学びを構想し、模擬授業等を通して自らの実践力を高めると同時にしっかりと省察することで、より良い体育授業の構築を図る。	
	初等教科教育法（英語）	小学校英語教育に関する基礎的な知識・理論について学び、実践的な指導技術を身につける。小中高の接続を視野に入れ、小学校段階としてふさわしいコミュニケーション能力を高める指導のあり方や、四技能（聞く・話す・読む・書く）の活動について検討する。その一環として、児童の年齢・発達に応じたシラバスの作成（年間・単元ごと）、教材選択・教材開発、評価（CEFRを含む）にも取り組む。受講者は講義内で扱う指導法を適宜体験しながら学び、模擬指導として実践を試みる。	

専 門 科 目	小 学 校 ・ 中 学 校 教 諭 専 門 科 目	英語科教育法Ⅰ	英語科教育における教授・学習の理論や学習指導要領に基づいた効果的な教育実践のあり方について考察する。主に第二言語習得、外国語教授法、学習指導要領、4技能、評価を中心に引き上げ、理論的・実践的に学ぶ。教員による解説に加え、受講生が各自指導の原理・原則など土台となる考え方を確立していくために、各自の経験や知識を踏まえて議論できる機会を設ける。	
		英語科教育法Ⅱ	英語科教育において効果的な授業実践を行うために必要とされる実践的な知識や指導技術について学ぶ。まず、教師の資質や授業運営などの基本的な知識を取り上げ考察する。続いて、聞く・読む・話す・書くことの4技能について指導の方法・技術の基本を学んだ後、受講生によるマイクロ・ティーチングを行い、活動等の考案、実施、省察を行う。さらに、学んだ知識・技術を踏まえて、実践の観察・分析も行う。	
	幼 稚 園 教 諭 ・ 保 育 士 専 門 科 目	保育原理	保育の理念や意義について理解する。保育が歴史的にどのようにして発展してきたのか、また、どのような方法があるのか理解する。幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における保育の基本について理解し、環境を通して行われる保育のなかでの子どもの姿、保育の質を保障する保育者の役割、計画・実践・評価・改善の過程について理解する。また、日本や諸外国の保育の現状と課題について考察する。	
		保育課程論	人格形成の基礎を培う幼児教育・保育の根幹となる「教育課程」の意義や概念、編成について、理論的、歴史的に学習しながら理解する。幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における保育の基本に沿って、保育課程の編成原理、指導計画やPDCAサイクルによる保育の質の向上について理解する。また、子どもの発達連続性に沿った、保幼小連携カリキュラムについても理解する。	
		子ども家庭福祉	子どもに関連する諸問題について、子どもの権利の保障を基本に捉え、家族と地域との関連において考察していく。また、児童福祉法のほか、子ども家庭福祉にかかわる法制度の成立過程をたどりながら、現代の子ども家庭福祉に関する実施体制について理解を深める。また、虐待事例などを通して、子どもと家庭に対する支援方法について具体的に理解を深めていく。	
		社会福祉	現代における社会福祉の意義と歴史的発展過程について学ぶ。また、現在の社会福祉に関する法制度や実施体制について学び、そのなかでの専門職の役割について理解する。さらには、現代の社会福祉サービス等の利用について学び、人々の権利擁護と保護の仕組みについて理解を深める。	
		社会的養護Ⅰ	社会的養護の必要性が高まっている現状から、社会的養護の意義や歴史的発展過程について理解する。また、日本における社会的養護の法制度や実施体制について学び、社会的養護が必要な子どもたちの生活実態について理解していく。さらには、社会的養護の背景を理解したうえで、子どもたちの支援方法について学んでいく。	
		保育者論	授業の全体を通して、保育者としての専門性とは何かについて理解した上で、保育および保育者を取り巻く社会情勢や実態について考察できるよう学習を進めていく。職務の専門性に加え、保育者の資質とは何かについて具体的な能力として理解した上で、自分自身に置き換え、身に着けていけるよう学習を深める。加えて、実際の園での保育者の姿から保育者の役割や保育者が理解しておくべき保育にまつわる問題・課題に関する理解を深める。授業においては保育にまつわる資料（映像等）を見るのみならず、レポート・ディスカッション・グループワーク等を通じて、保育・保育者について考え、表現する力をつけることや自分自身の保育者観を形成することをめざす。	
		保育の心理学	発達に関わる心理学の基礎を、実践に活かせる知識として習得する。最初に、子どもを理解する方法として発達についての心理学を学習することの意義や、子ども観、保育観について学ぶ。次に、心理的側面の各領域についての基本を習得し、それらが具体的な保育実践とどのように関連するのかを生涯発達の観点から考察する。確かな知識を身につけ、発達に応じた子どもへの働きかけや、調和のとれた子どもの育ちを支えられる保育者をめざす。なお、養護と教育の一体性を理解した上で、保育における人と環境の相互作用についても理解を深めていく。	
		子ども家庭支援の心理学	生涯発達に関する心理学の基礎的な知識を習得した上で、乳幼児期の発達課題および経験の重要性に関する理解を深める。特に、家庭での経験の重要性に関して、親子関係、家庭環境の視点から包括的に捉える視点を養う。現代社会における子育て家庭の現状と課題を理解した上で、子どもの精神保健を捉えることができるよう学習を深めていく。	

子どもの理解と援助	保育に関連する心理学的知見を踏まえて、より実践的に子どもの発達と保育者の役割について理解を深める。学生が現場に出て実際に子どもの保育を行うにあたり、必要となる考え方や知識を実践的に学ぶ。具体的には、発達段階にあった保育とは何か、保育環境をどのように整えるのかなどを、事例や映像教材を用いて具体的かつ実践的に学ぶ。また、保育という行為は、社会の中で大きな役割を果たす重要な営みであるという自覚を促す。 なお、一人一人の心身に応じた発達や学びの把握の重要性についても学習を深めていく。	
子どもの保健	子どもの健康増進や保健の理念を育むために、子どもの健康、成長・発達、養育環境、母子保健活動、疾病予防について学ぶ。また、養育者の子育て不安や子どもの虐待など、子どもと家族をとりまく近年の諸問題の背景や予防などについて理解する。さらに、子どもの保健に関して保育士に期待される役割や保育現場に期待される取り組み、家庭・専門機関・地域との連携について理解し、これからの保健活動を考える素地を養う。	
子どもの健康と安全	本科目は、子どもの健康安全に関する計画の策定、環境整備、疾病予防と救急処置、安全管理、子どもの心と体の健康づくりに関して取り扱う。これらの内容を通して、保育者の保健及び安全に関する実践力を培うことを目的としている。そのため、講義に加えて、演習や事例検討を取り入れて行う。食物アレルギーへの対応やトリアージの判断は重要であるため演習で取り入れて行う。また、ケースメソッドによる協議により、学生が自ら考え判断し実践できる実践的力量を培う。	
子どもの食と栄養	子どものライフステージ（新生児期・乳幼児期・学童期）別に個人の身体状況、運動機能、精神機能や生活習慣行動の発育に応じた「食と栄養の関わり」について基礎理論と実践方法を修得することを目指す。本講義では、子どもの健康と食生活の意義、栄養に関する基本的知識、子どもの発育・発達と食生活、食育の基本と内容、家庭や児童福祉施設における食事と栄養の現状と課題、特別な配慮を要する子どもの食と栄養について学修し理解する。	
子ども家庭支援論	社会の変化に伴い、家族の形態や機能が変化するなかで、現代の子育て家庭は、さまざまな問題を抱えている。授業では、そうした子育て家庭の現状と家庭に対する支援策を学びながら、保育所や地域でどのような家庭支援や子育て支援が必要なのかについて、理解を深めていく。事例などを用いてグループ討議を行いながら、家庭の支援方法について具体的に学び、理解を深める。なお、保育士として必要な家庭支援の具体的な方法についても学んでいく。	
保育内容総論	幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づいた、保育内容について理論的・歴史的な観点から理解を深める。子ども一人ひとりの発達に応じて、遊びをととした総合的な活動を指導することによって、子どもは「生きる力」の基盤となる心情・意欲・態度を育んでいくことを学ぶ。そのためにも、保育内容の総合性と各領域との関連性について理解し、幼児理解と援助のあり方、指導計画作成と保育実践、評価と反省、記録の取り方、現代的な課題などを保育実践につなげて学ぶ。	
保育内容（健康）	生きる力の基礎は、乳幼児期に培われる。乳幼児が生き生きとした生活を送ることができるように、健康への十分な留意は言うまでもない。本授業では、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示される基本原則を踏まえ、領域「健康」のねらいと内容を解説するとともに、健全な発育・発達を阻害している現代の健康問題を起点に考察し、アプローチしていく。	
保育内容（人間関係）	乳幼児期の人間関係について、子どもの発達に沿いながら事例をとおして理解を深め、子どもの発達段階にふさわしい人間関係の環境や指導計画について理解する。また、具体的な指導案を計画し、グループワーク等を通して振り返りを行いながら、具体的な人間関係にかかわる保育内容の指導法を実践的に学ぶ。幼稚園教育要領等から現代的な課題を理解したうえで、保幼小連携や現代社会における人間関係の諸側面についても理解を深める。	
保育内容（環境）	領域「環境」の指導に必要な基本的知識・技能を身に着ける。幼児を取り巻く環境と幼児の発達にとっての意義を理解するとともに、事例の読み解きや教材研究等を通して、幼児にとって身近な環境と幼児の発達との関わりを幼児の具体的な姿から理解する。幼稚園教育要領のねらいおよび内容を踏まえ、領域「環境」に関連する保育活動を計画するにあたって基礎となる力を養う。	

保育内容（ことば）	言葉について、乳幼児期の言語的発達を踏まえ、事例から保育における子どもの言葉によるコミュニケーションや「話し言葉」、「書き言葉」、「文字」の役割について理解し、子どもの発達段階にふさわしい言葉の環境や指導計画について理解する。また、絵本や幼年童話などの児童文化財や、指導案の作成など具体的な言葉に関わる保育内容の指導法を実践的に理解する。保幼小連携や現代社会における言葉の諸側面についても理解を深める。	
保育内容（表現）	保育における5領域の区分と、そのひとつである「表現」について学び、表現とは何かについて考察を行う。子どもの発達段階における表現とその特徴を理解し、表現する力を育てるための活動設定や援助方法を自ら考えることができるようにする。 また、保育者として多様な表現力を養うことで、子どもに適した保育実践を組み立てる能力を身に付ける。これらによって豊かな感性や人間性を育み、子どもたちに表現することの楽しさを伝えられる保育者を目指す。	
保育内容演習（健康）	子どもの身体活動量や遊び体験の減少が心身の健康を脅かし、深刻な問題となっている。子どもたちの生きる力の基礎を培うには、保育者はどのような保育環境や具体的な指導や援助が必要なのか、理解を深める必要がある。本授業では、領域「健康」のねらいと内容を理解し、健康及び運動遊び指導を演習形式で展開していく。更に保育者は、お互い連携し合い、子どもの健やかな成長のために十分話し合うことが求められる。そのためにも、演習課題については、仲間とともに活動し取り組む。	
保育内容演習（人間関係）	幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「人間関係」について、乳幼児期に愛情や配慮に満ちた暖かい人とののかかわりのなかで育つことで、子どもが安心感や信頼感を育むことを学ぶ。これが、その後培われるさまざまな感情や、人間関係を築く基盤となることを理解する。乳幼児期の発達とともに、子どもが人とののかかわりを深めながら自己を築き、他者と共に生きる力を育んでいくための保育方法と内容、発達の過程、保育者の関わり方や指導法・援助、現代的な諸課題について、事例や指導案の作成等を通して学ぶ。	
保育内容演習（環境）	保育内容（環境）で培った基本的知識と技能をもとに、保育の指導法について実践的に理解する。幼児の発達と幼児を取り巻く身近な環境への理解を深めた上で、領域「環境」のねらいと内容を踏まえた保育計画、指導案の作成を行う。さらに模擬保育を計画・実施することで教材研究や領域「環境」を柱とした活動について実践力を高める。	
保育内容演習（ことば）	幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「言葉」について、乳幼児期の子どもについて言葉の発達について理解を深める。また、子どもの言葉の育みを援助するうえで必要な、発達に沿った望ましい援助のあり方や意義について学ぶ。自分を理解・調整し、他者とかかわりを深めていく言葉の役割を、個と集団としての子どもの姿をとらえて理解する。そうした子どもの言葉を豊かにする、絵本や紙芝居などの児童文化財の意味、子どもの言葉を取り巻く現状と課題などについて事例や、指導案の作成等を通して実践的に学ぶ。	
保育内容演習（表現）	保育における5領域のなかの「表現」の内容について確認し、子どもの遊びや表現は、造形表現、身体表現、音楽表現等、多分野に跨っており、それらの総合的な学びが子どもの発達にどのような影響を与えるのかについて学ぶ。領域横断的な子どもの表現力を育むための適切な支援方法を、演習を通して身に付ける。また、保育者間の協働を意識し、他の受講生と協力して活動しながら、子どもの表現のみならず、自らが高い造形表現能力及び音楽表現能力をもった幼児教育の指導者となるべく技能と知識の習得を図る。	共同
幼児理解と教育相談	幼児理解の基礎となる発達心理学、臨床心理学等の理論を解説する。加えて、幼稚園教諭の専門性としての幼児理解のあり方を幼児教育の特質と関連付けて解説する。次に幼児理解の具体的な技法である観察、面接（カウンセリングマインドを含む）を解説する。さらに幼児理解に関連する幼児教育の実践として、映像、エピソード記録等によるカンファレンスを実施する。それに加え、特別支援教育の視点から見た幼児理解、幼小接続における幼児理解のあり方についても概説する。また幼児期における教育相談の基礎知識を概説する。具体的には、教育相談の意義や内容、担当者の役割、幼児を理解する上で必要な事柄、教育相談の基盤となるカウンセリングの基礎知識につき概説する。さらに幼児及び保護者を取り巻く諸問題を取りあげ、グループワークを実施し、対話により、理解を深めさせる。	
乳児保育Ⅰ	乳児の保育に関して3歳未満児を中心に、各月齢・年齢の乳児の発達および特徴を理解する。その上で乳児期の基本的生活と遊びのねらいと内容、その具体的方法を学ぶ。さらに保育士としての役割と具体的な援助方法について知る。	

専門科目	幼稚園教諭・保育士専門科目	乳児保育Ⅱ	乳児の保育に関して、演習を通して適切な援助方法を実践的に学びながら、乳児の基本的生活の流れその内実、遊びとその意義についての理解を深める。また、乳児の発達理解に基づいた保育の記録と計画の方法の習得を目指す。また、乳児保育の現状と課題についても見識を深め、保育における他機関との連携の重要性を学ぶ。	
		社会的養護Ⅱ	施設養護を中心とした日本での社会的養護の現状について理解し、それぞれの施設での個別支援計画を基本とした子どもとのかかわり方について理解する。また、子どもだけでなく家庭への支援、地域との連携方法についても学び、現代の社会的養護における保育者としての専門性について具体的に理解を深める。なお、上記学習を通じて社会的養護の基礎的な理解を深めるとともに、子どもの虐待防止や家庭支援、家庭養護の実践についても理解していく。	
		子育て支援	子どもたちの望ましい発達のためには、保育の中での保育者の「子どもたちとのかかわり」だけでなく、子どもたちが家庭生活を共にする「保護者への支援」も重要であり、その必要性が増している現状を理解する。そして、保育相談の意義と原則を学び、保護者の支援を行うための基礎を理解する。また、講義だけではなく、演習・実習を取り入れ、応答方法、相談面接の方法など理論に基づいた実際の援助方法を体験することで、更に理解を深め、技術の習得を目指す。なお、上記学習を通じて、子育て支援の具体的な理解を深めていく。	
		幼児・児童文化	ことばに関する保育の内容を理解し、子どもの遊びを豊かに展開するために必要な言語表現に関する知識や技術を習得する。絵本、紙芝居、ペープサート、ストーリーテリング等、ことばに関する様々な児童文化財についての知識と技術を学ぶ。また、子どもが主体的に児童文化財に親しむ経験や、子どものことばに関する表現活動が広がるような遊びや保育環境、それらを用いた行事や家庭との連携等について、多角的に理解を深め、自ら計画を立てる。また、子どもの遊びやイメージを豊かにし、感性を養うための保育の環境構成を考え、指導案等を作成し、具体的に展開できるための技術を習得する。	
		表現演習Ⅰ	保育所実習Ⅰおよび幼稚園実習を見据えたピアノ実技技能の強化を目的とする。季節や行事に関連した童謡の弾き歌い技術の強化や、絵本の読み聞かせにおけるピアノを使った音響効果の模索を主とし、各自の能力に合わせてそれぞれの課題を明確にし問題解決及び能力向上を目指す。	
		表現演習Ⅱ	子どもにとっての造形は成長発達に書くことのできない重要な活動である、そのため、各時期の子どもの発達に合わせた造形活動を援助する力を身に付けることは保育者としての資質向上に役立つと考えられる。この授業では、子どもの生活に身近な材料を用いて、平面、立体の造形活動を体感しながら、それぞれの活動の教育的意義を理解することを目標とする。また、受講者がさまざまな素材を用いて実際に造形活動を行うことによって、造形の基礎的技術を習得し、子どもへ指導できるようになることを目指す。	
	教科専門科目	国語（書写含む）	学習指導要領により、国語科の目標・内容について認識を深める。物語・韻文を中心に文学の流れを学習させる。授業中に論議場面を設定し、言語によるコミュニケーション能力を伸長させる。作品分析・鑑賞を通して言語の役割を学ばせる。書写の目的や技能について学ばせ、基本技能を習得させる。	
		社会	小学校3・4年生の学習内容である身近な地域の調査活動の方法や地域の教材化にはじまり、子どもの空間認識を広げていくための指導方法についての理解を深めることによって、5・6年生の学習につなげるための社会認識と社会参加の授業づくりの基本を身に付ける。また授業案の作成や提案授業などを通して、学習者としての子ども理解をふまえながら社会科の学習の具体的な方法についての理解を深める。	
		算数	小学校学習指導要領の「算数科」の指導内容とその系統性を理解するとともに、問題の演習等を通して数学的な見方や考え方を身につけ、多面的・論理的に思考し表現する力を養う。また、幼稚園（保育園）、小学校、中学校の内容の系統についても触れ、算数科指導に向けた態度を養う。	

専 門 科 目	教 科 専 門 科 目	理科	小学校理科の「物質・エネルギー」と「生命・地球」の2領域における最低限必要とされる知識・技能を修得し、小学校理科の授業を担当できる力を身に付ける。①「物質・エネルギー」領域では、自然の事物・現象を主として質的・実体的及び量的・関係的な視点で捉えられるように、どのような現象を観察・観測させるのが効果的かを理解した後に、実際に器具類を使って実験・観測を行う。また、事故の事例とその安全対策、さらに実験器具づくりに必要なガラス細工等の初歩技術、基本的気体の発生等を理解した後、実際に装置を組み立て実験を行う。実験廃液の処理方法についても修得する。②「生命・地球」領域では、生命に関する自然の事物・現象を主として多様性と共通性の視点で捉えられるように、光学顕微鏡の使用法や実際に野外での観察等を行う。また、地球や宇宙に関する自然の事物・現象を主として時間的・空間的な視点で捉えられるように、身近な天体と気象、大地のつくりと変化に関する基本的な知識を修得する。さらに、野外における地形と地層の観察法についても修得することを目指す。	
		生活	小学校低学年における教科である「生活科」について、幼稚園・保育園とのつながりを視野に入れながら、生活科の誕生の背景、意義、目標、内容などを多面的に学ばせていく。さらに、生活科の指導と直接かかわりの深い、体験活動の実践、スタート・カリキュラム、児童の試行・予測・工夫を促すための指導方略、学校と家庭や地域とのかかわり等について多面的に追究し、生活科の本質を理解させ、教師としての基礎的な素養を涵養していく。	
		音楽基礎	小学校音楽科における表現・鑑賞領域および幼稚園表現領域の教育の意義を理解するとともに、授業や活動を構成する際に必要な知識や基礎的な技能を学ぶ。幼稚園で使用する簡単なリズム楽器や小学校で使用する楽器等の奏法を知る。ソプラノリコーダーや鍵盤ハーモニカを用いてその基本的な演奏技能を学ぶとともに授業等に活用する力を養う。	
		図画工作	幼児から小学校高学年までの子どもに図画工作の指導をすることを想定し、最も一般的に使用される描画材料である紙と水彩絵の具を用いた制作を通して、様々な技法を身に付ける。平面作品を制作することで絵画、デザインの基礎を身に付ける。平面作品を利用し、生活空間を飾るものを立体で制作することによって、図画工作の絵、立体、工作、造形遊び、鑑賞のすべての分野の関連について理解する。	
		体育Ⅰ	体育授業で取り扱われる各運動領域の内容について実技を通して理解するとともに、自身の身体能力や運動技能を高めていく。また、ルールを守り仲間とともに運動を楽しむことや集団協力や責任行動の能力といった社会性の向上についても留意しながら、「できる」「わかる」指導を追究し、体育指導に向けた態度を養う。	
		体育Ⅱ（リズムダンス）	幼児体育や小学校体育の中で取り扱われるリズムダンス（身体表現、表現運動、リズム遊びを含む）について、実技を通して理解するとともに、自身の発想を豊かにし、身体を使ってイメージを表現する力を身に付ける。また、集団での様々な創作活動を通して、構成や指導のあり方について学んでいく。	
		家庭	小学校家庭科を指導するために、現行の学習指導要領の目標、内容を理解し、家庭生活に関する基礎的・基本的な知識と技能を身につける。さらに学生自身が生活を見直し、充実した家庭生活を営むことのできる実践力の育成を図る。	
		小学校英語	指導者としての授業実践力を高めるため、実際の授業場面を意識し、具体的な活動を適宜取り入れながら「聞く・話す（やりとり・発表）・読む・書く」の4技能5領域における英語運用力を高める。児童への指示出しや声掛けなどの「教室英語（Classroom English）」についても集中的なトレーニングを行う。 小・中学校接続を踏まえ、各段階での児童の学びのあり方や指導内容の違いなどについて把握し、小学校段階における指導のあり方を考察する。英語に関する背景的な知識として、音声、語彙、文構造、文法、正書法などについての理解を深め、具体的にどのような指導方法が考えられるかを検討する。絵本や子ども向けの歌、詩などの児童文学に関する基礎的な知識を学び、代表的な作品を題材としたアクティビティなどを考案・検討する。さらに、異文化理解に関する知見を深め、実際の活動を考案・検討する。	

専 門 科 目	英語学概論	この授業ではまず母語、第二言語、外国語としての英語をそれぞれに考察する。次に「社会」、「相手との関係」、「文化」、「非言語」という文脈の中で英語でのコミュニケーションがどのように行われているかを分析する。さらに、「語彙」、「文法」、「音韻」からみる英語らしさを分析し、最後に「英語教育」、「情報化社会」、「文学研究」という側面から英語について概説する。	
	英語文法論	この授業ではまず英文をその基本要素と補助要素に分け、文の構造理解に必要な文法の知識を身につける。次に構文という視点から英文法について考察を行い、文法規則の体系的な理解を目指す。さらに、文法項目ごとに練習問題を使って文法知識の確認を行う。また、予習として読んできた文法内容や、講義で扱った文法内容を復習として自分の言葉で発表してもらう講義形式も適宜取り入れる。	
	英語文法演習	この授業では、基本文法を復習しながら英字新聞を読むうえで必要な文法知識についても触れ、まず英文和訳を通して英文記事の内容を理解する練習を行う。次に英作文の練習によって、記事の内容を理解することで得られた知識や情報をもとに自分の意見や考えを組み立てられるようにする。さらに記事の内容に関する質問に答えながら受講生同士の意見交換（ディスカッション）につなげる。英字新聞の読解には語彙も重要な役割を果たすと考えられるので、授業ごとに復習として語彙の小テストを行う。	
	英米文学概論	英語による語学力・コミュニケーション能力に加えて、英語教育を担う教員の素養としては欠かせない「英米文学の常識」とその背景をなす「英語の文化的知識」に関するテキストを、ほぼ毎回1章ずつ読み進め、英語による文学作品解釈のための基礎力となる英語世界における「常識」を学ぶ。特に重要な箇所については担当者間であらかじめ分担し、内容のポイントをまとめておく。担当者による要点の発表を聞き、日本語の文化との違いについて考察し、グループディスカッションを行う。	
	英米文学史	日本文学にも大きな影響を与えてきたイギリス文学とアメリカ文学について、それぞれの発展の概略を学ぶ。その中でも特に英米文学の発展に特に大きな功績を残した作家たちについては、作家個人やその代表的な作品についての興味深いエピソードを知り、作品に関する知識を定着させる。また、第一級と評される作品の背景にある当時の人々の日常生活や関心事、喜怒哀楽について知り、人間性への理解を深めつつ、作品の鑑賞力を高める。	
	英米文学講読	英米文学における有名な短編小説を原文で精読する。学校で習ってきた英文法には当てはまらない表現方法についても学びながら、これまでに身につけてきた英語の文法力や語彙力をさらに向上させ、読解力を身につける。また、それぞれの作品の登場人物の心の動きや行動についてのグループ・ディスカッションを行い、人間性についての理解を深める。	
	英米文学演習	英語の詩を正しい発音で読むことができるように、英語の発音記号について学び、発音記号から単語を推測できるようにする。また、英語の音節とリズムについて学び、英語の音のおもしろさ、美しさを体得できるようにする。さらに、英語の詩を鑑賞し、これまで学んできた英文法の知識を十分に活用してよりよい日本語訳を検討することにより、日本語と英語の言語的特徴、表現の違い、与える印象の違いについて考察する。	
	言語習得研究	この授業では、ことばに関わる次のような分野を扱う。子どもの母語の獲得、第二言語（外国語）の習得と学習を議論し、二言語併用（バイリンガル）について考察する。さらに、21世紀のグローバル化された世界における異文化間コミュニケーションの問題として言語を捉え、相互理解のためのより豊かな言語生活をめざす。	
	英語表現Ⅰ	この授業では、身近にありそうな場面を題材にした教科書を用い、まずモデル会話を通してより良い人間関係を築くための会話のコツを学ぶ。次にそのコツとなる表現を口に出して練習し、ディクテーションや練習問題を使って定着させ、ペアワークやグループワークを通して会話練習を行う。最終的には、実践の場で円滑な人間関係を保ちながらコミュニケーションを取ることができる力を養う。	
	英語表現Ⅱ	この授業では、5つの大きなスキルに対して、3通りずつのライティング活動を行う。1つのスキルに対して同じタイプのライティング活動を3回繰り返すことで、書くためのスキルや知識のより深い定着を図る。ライティングのテーマは少しずつ変わっているので、飽きることなく設定課題に取り組めるようになっている。ライティング活動においては、語彙力も欠かすことのできない要素であると考えられるので、各テーマの後には復習として語彙の小テストを行う。	
	English Writing	本授業では、具体的なテーマに沿ったパラグラフ・ライティングを行うことを主とする。毎回、受講生には作成したライティングの提出が求められる。従って、事前準備により、内容理解をしておくだけでなく、書く内容に関する資料等を準備して授業に臨むことが必要である。	

専門科目	グローバル人材の育成	国際理解教育概論	地球時代・多文化共生社会が、教育にもたらす変化について多様な事象を素材に論説する。また、国際理解教育に関わるさまざまな論の検討を通して国際理解教育の概念を考察し、論ずる。国際理解教育の理論・実践研究の経緯と最新の状況について、多様な論文・実践事例を紹介しつつ解説する。さらに、多様な人々との共生に不可欠な技能としての対話力の重要性を論じ、実習により技能を習得させる。 地球的課題についてアクティブ・ラーニングを多用し、グループが協同する調査をさせ、21世紀型能力が示す、深い思考力、主体性、対話力の育成を目指す。	
		多文化理解概論	文化の概念について先行研究をもとに整理し、説明する。英語圏における、生活生業文化における多文化化の進行の現状を紹介し、把握させる。カナダ、ニュージーランドや国内の学校における多文化理解教育の実践を紹介し、学習内容や方法について認識を深めさせる。「ユネスコの文化の多様性に関する宣言」を活用し、多文化理解の基本的な在り方を説明する。多文化理解に関わる学習方法を説明し、実践方法を修得させる。多文化理解のための授業を構想させ、実践させる。国際都市となった金沢において、多様な文化をもつ人々と英語を使った交流体験をさせ、言語の重要性を認識させる。	
		文化比較論	多文化共生社会における行動や思考のおおよそのパターン3つ（「同時進行型」、「順次行動型」、「順応型」）について学び、それぞれのパターンが顕著に見られる国の人々（イタリア人、ポルトガル人、ドイツ人、スウェーデン人、日本人）の日常生活に表れる具体的な行動の例を知る。また、取り上げるテキストの各章において、筆者が英語で投げかけている諸問題を正しく理解する。さらに、これまでに経験した、その問題にかかわる具体例をあげて、どのような解決策が可能なのか話し合う。	
		地球市民論	北陸JICAと連携し、体験学習や参加形学習を取り入れる。平和・環境・人権・貧困等の今日の地球的課題についての理解を深め、その解決のための市民性の育成に果たす教育の役割について考えとともに、ファシリテーターとしての教師の役割や、表現力、コミュニケーション力、他者との協働の方法等、これからの教師に求められる資質・能力の向上を図る。	
		グローバル対話論	グローバル時代の人間形成について、さまざまな見解を整理し、説明する。対話と人間形成との関わりについての言説を紹介し、対話の概念を提示する。グローバル時代の対話力の特質を検討し、多様性の尊重、異質の活用による新たな解や叡智の共創について明示する。対話の基礎としての「聴く」「話す」の基本的な考え方や習得方法を示し、実体験させる。グローバル時代の対話の特質を活用した対話体験をさせる。以上の作業を通してグローバル時代の対話力の向上を目指す。	
		生物多様性概説	生物多様性の概念についての認識を深めさせる。地球生命系に多様性と生物相互の共生に仕組みについての解説する。人と動物との共生の歴史について犬をテーマに説明する。持続可能な社会の形成における多様な生物相互の関わり的重要性について、事例をもとに解説する。現代社会における人と生物との関わりについて、犬と人との関わりを事例にさまざまな形態を紹介する。生物多様性への認識を深める教育実践の方法を学ばせ、授業を構想させる。	
		海外英語教材比較研究	英語で書かれた絵本、物語作品の講読を通して、異文化理解を深める。表層的なプロット理解に留まらず、背景にある文化を含めて作品世界をとらえ、文化相対主義的な視点から分析・比較・考察するための視座を養う。受講者はグループごとに作品の講読、分析・考察、ディスカッション、発表を行う。必要に応じて、教科としての英語の授業内で絵本、物語を用いる際の展開の仕方や補助教材・教具の作成法などについて実践的に学ぶ。	
		小学校英語教育概論	小学校で外国語として英語を教えるためには何が必要であろうか。ただ英語ができるだけでも、また教え方のハウツーを知っているだけでも十分ではない。この授業では、小学校での英語指導に関連して、目的論から、教授法、教材を議論し、特に年齢を中心とした学習者要因に注目し、小学校で英語を指導するための資質を育成する。	
		英語プレゼンテーション	この授業は、英語プレゼンテーションの方法、具体的には、資料収集、原稿作成、聴衆の前での発表、質疑応答などの方法を、学生が授業内で能動的に実践しながら学ぶことによって、「読む・聴く・書く・話す」の四技能を総合的に高めることを目的とする。最終的には、基本的な英語表現を使って、簡単なプレゼンテーションや初歩的なディスカッション等のコミュニケーションがとれるようになることが求められる。	

	グローバル人材の育成	英語コミュニケーションⅠ	英語コミュニケーション能力の向上を目指し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能における知識・技能の習得及び運用能力向上のための実践的なトレーニングを行う。ペア・ワークやショート・プレゼンテーション、ディスカッション等の活動を適宜取り入れ、実際のコミュニケーションのなかでの実践的対応力を養う。	
			英語コミュニケーションⅠに引き続き、英語コミュニケーション能力の向上を目指し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能における知識・技能の習得及び運用能力向上のための実践的なトレーニングを行う。ペア・ワークやショート・プレゼンテーション、ディスカッション等の活動を適宜取り入れ、実際のコミュニケーションのなかでの実践的対応力を養う。	
			グローバル化が進行している現代社会のなかで、保育現場においても、多様な文化背景をもった子どもたちや家庭が増えており、多文化・国際化した社会に対応できる保育者の養成が求められている。幼児期から子どもが互いの違いを肯定的に受け止め、個人を尊重する態度を培うことや、保護者支援、地域との連携などを含めた、多文化共生の社会を作る担い手として保育者に求められる専門性を理解する。教育学科の幼児教育・保育にかかわる教員が、それぞれの専門分野から講義を行う。 また、文化の多様性を理解するということは、現在自分が生きている文化のなかにある支配的なものの見方を相対化することであり、それは社会の中で正解のない問いを考え続けていくことの始まりでもある。15回の講義を通して、受講者自身が自己を振り返り、これからの社会を生きるうえで必要な複合的な視野を育む。 (オムニバス方式/全15回) (9. 米川(平石) 泉子/2回) 初回は、文化の多様性を理解するために、構成主義の考え方について学ぶ。2回目は、保育における多文化理解と受容の現状と課題について、事例などから検討する。また、具体的な絵本、児童文学から、保育における多様性のあり方について考える。 (11. 村松麻里/2回) 様々な文化的背景をもった子どもたちがともに学ぶイギリス、アメリカの学校で実践されている、絵本教材を用いた言語教育及び、英語のわらべ歌を用いた歌あそび(Education Through Music)を事例として、体験しながら、物語・あそびを通したユニバーサルな学びについて考察する。 (18. 松下(吉岡) 明日香/2回) OECDの調査結果等を基に諸外国の保育の動向を概観する。また、欧州、アジア、アフリカ等の保育実践を紹介しながら、多様な文化、歴史、地域性、ニーズによって異なる保育の在り方とその本質を探索。 (10. 竹澤賢樹/2回) 多文化理解の求められる子ども家庭支援について学ぶ。初回は、国籍や文化的背景の違う人々が、日本の中で子育てをするうえで抱えるさまざまな困難さや抱く感情等について理解する。2回目は、具体的に活用できる社会資源や地域の連携のあり方を検討し、有効な子育て家庭への支援方法について考える。 (16. 家崎萌/2回) 視覚表現や造形表現等の非言語メディアによる子どもの異文化コミュニケーションについて学ぶ。1回目は中欧の事例を中心に非言語メディアが多文化共生社会において果たす役割を考える。2回目は、多様な他者と表現し、交流する子どもの活動について、実践を通して考える。 (17. 枝元香菜子/2回) 1回目は世界の子どもたちの身体活動状況を理解するとともに、健康に生活するためには何が必要かを様々な視点から考えていく。2回目は多文化共生社会におけるスポーツをテーマに、スポーツの持つ力や各国の取り組みについて理解を深める。また、国籍や障がいの有無に関わらずみんなと一緒に楽しむことができるスポーツについても考えていく。 (15. 森舞/1回) 多様性と子どもの表現について学ぶ。多文化社会のなかでのさまざまな表現のありかた、取り組みなどについての理解を深める。 (12. 奥泉敦司/2回) 乳幼児期の教育・保育の有無や質が生涯に渡る影響を及ぼすことについて、世界および日本のデータに基づき理解を深める。乳幼児期の教育・保育が有する今日的意義の理解を深めた上で、保育者という職業が持つ特性や影響力について、具体的な保育行為から考え、多面的価値観に基づく保育者像について考え、自身の保育観を身に付けていく。	オムニバス

新課題対応力の育成	ICT活用教育概論	インターネットの発達とタブレット端末の登場により教育の情報化が進展し、新しい学習指導のあり方が求められている。本講義では、これまでの視聴覚教育の歴史を踏まえ、学校教育におけるICT活用の意義、目的、特長を理解し、タブレット端末や電子黒板等のICT機器、デジタル教科書や教育用アプリケーションの活用について、習熟、説明、提示等の視点に基づき、各教科の具体的な実践場面を取り上げて講義する。学習指導案作成や模擬授業を通して、小学校の各教科におけるICTを活用した学習指導法を習得することを目的としている。	
	デジタル教材開発	まずは次期学習指導要領につながる文部科学省の「学びのイノベーション」を検討し、一斉授業、個別学習、教材研究におけるデジタル教材に関する基本的な理論を身につける。その知見を基に、特に協働学習、アクティブ・ラーニングにおけるデジタル教材の作成とその検証（模擬授業）を通してデジタル教材に関する理論と実践を身に付ける。Windows版およびiPad（iOs）のタブレット端末双方に対応できるように幅広く技能を身に付ける。	
	ICT活用とインクルーシブ教育	ICT機器の活用による教育的ニーズを抱えた児童・生徒への教育方法の理解を深め、その実際を学ぶ。ICT活用により、教育現場が抱える教育課題を持つ子や特別なニーズを抱える子どもをはじめとして、個々の子どもの困りごとに対応する教育の在り方とその実際への理解を深める。子どもが有する教育的ニーズをICT機器の活用を中心とする教育実践により適えていく教育を実現するために実際のICT活用によりインクルーシブな教育環境を整えていく具体的方策を学び、教育方法を習得していく。 （オムニバス方式/全15回） （14. 山口真希/7回） インクルーシブな教育環境を実現するための情報機器の効果的な活用に焦点を当てる。児童・生徒の教育的ニーズに適えるICT機器の活用について、ハード面及びソフト面からその可能性の理解を深める。また、ICT機器を活用し、ソフトウェアを使用した教育的ニーズに適える課題解決型の授業を設計する。 （4. 佐田東彰/8回） 学校内、教室内における児童・生徒の教育的ニーズの発掘とその解決方法について特別支援教育およびインクルーシブ教育の理論的背景から理解を深める。連携の方法や活動づくりについて実践例をもとに理解を深めるとともに、実際に地域に出かけ、どのように地域において学社連携をしているのかについて体験を通して理解し、地域における教師の役割についての認識を深める。	オムニバス
	「チーム学校」と学校組織マネジメント	「学校における組織マネジメントとは何か」「なぜ今、学校において組織マネジメントが求められるのか」「カリキュラム・マネジメントがなぜ重要なのか」「なぜ学校はチームでなければならないのか」「なぜ教員に同僚性が求められるのか」などについて、小学校や中学校での具体的な事例を通して考えるとともに、その背景にあるピーター・センゲの「学習する組織」の理論やオットー・シャーマーの「U理論」などの知見についても学ぶ。さらに、グループワークや討論などの主体的・協働的な学びを通して、学生一人一人の思考力や表現力等が高まること、自他のよさを発見し自己肯定感が向上することを目指す。	

専門科目	新課題対応力の育成	地域協働と学校の役割	生涯学習社会における学校の役割を理解し、学習指導要領における「開かれた教育課程」に留意した学校づくりの担い手としての役割遂行や力量形成に資するための基本的な知識を習得する。また生涯学習の理論的基盤や学社連携の理論的な理解と、その実践事例を検討するとともに、学校・家庭・地域の協働の視点から、地域社会における人的教育資源・物的教育資源や機能のネットワークの形成について考察を行う。 (オムニバス方式/全15回) (6. 田邊俊治/2回) 地域における教育事情に関連して、学校と教職員の社会的役割、組織文化と協働性、校外研修、学校と大学との連携事業、協働的学校経営と教育委員会制度といったことについて包括的に学習する授業を担当する。 (2. 米澤利明/3回) 地域教育課題を抱える学校が行政機関など地域社会との「協働」というアプローチによって、地域の様々な教育機関等とともに教育課題の解決を図っていく方策とはどのようなものかを探らせる。特に地域の教育課題に関連して、学校や行政機関と地域との協働事例等を取り上げ、地域と協働して教育課題の解決を図っていく方策を学習する授業を担当する。 (7. 木村昭雄/5回) 家庭や地域社会との連携の方法や活動づくりについて実践例をもとに理解を深めるとともに、実際に地域に出かけ、どのように地域において学社連携をしているのかについて体験を通して理解し、地域における学校の役割についての認識を深める。 (13. 小平豊彦/5回) 学校と公民館や児童館などの社会教育施設との連携の方法や活動づくりについて実践例をもとに理解を深めるとともに、実際に地域に出かけ、どのように地域において学社連携をしているのかについて体験を通して理解し、地域における学校の役割についての認識を深める。	オムニバス
		スクールソーシャルワーク論	教育現場での子どもの現状を把握し、子どもを取り巻く環境との関係性の捉え方について学ぶ。また、スクールソーシャルワークの歴史や日本における発展過程、現在のスクールソーシャルワーク事業の概要についても学んでいく。さらには、スクールソーシャルワーカーの役割と実践について理解する。	
		特別支援教育総論	特別支援学校、特別支援学級に在籍する特別な支援を要する児童生徒への理解と教育、及び通常の学級にも在籍している発達障害をはじめとする様々な障害等により特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・達成感をもちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識や支援方法を理解する。	
		教育相談	教育相談の基礎知識を概説する。具体的には、教育相談の意義や内容、担当者の役割、児童生徒を理解する上で必要な事柄、教育相談の基盤となるカウンセリングの基礎知識などにつき概説する。それに加え、児童生徒を取り巻く諸問題を取りあげ、グループワークなどを通して理解を深める。さらに、保護者への対応や教師自身のメンタルヘルスの実際についても概説する。	
		障がい児保育	障がい児保育の基本理念と意義について概説する。現代の保育環境における形態と障がいのある子どもについての理解を深めると共に、それぞれの障がいの種、原因、主な特性について概説する。さらに、障がい児の発達の特性や課題点について考え、家庭支援、関係機関との連携、就学について解説し、保育現場での実践について概説する。	
		障がい児教育	特別支援教育では、特別支援学校や、幼稚園、小学校、中学校及び高等学校等において、様々な障がいのある幼児児童生徒一人一人のニーズに応じた適切な指導と支援が求められている。特別支援教育の対象であるそれぞれの障がいの理解と指導内容・方法等の基本的事項について概説する。	

専 門 科 目	実 習 関 連 科 目	学校インターンシップ	「大学で学んだ知識は将来一体何の役に立つのか？」昔から多くの学生が、一度は思い悩むことである。社会に出て初めて理解できる知識不足や認識不足、自己の未熟さというものは、養成期に修得することが極めて困難である。本授業は、学校に直接赴き、授業や課外活動における学習支援や補助業務を通して、教師役割の遂行や児童生徒の実態把握、地域や保護者との連携の一端を体験し、教職課程で学んだ知識(理論)と教育現場の実際(実践)を融合させ、学修の意味を理解することを目的とする。	共同
		保育インターンシップ	保育現場における諸活動(保育補助、行事、事務等)を通し、実務全般を経験するために実施する。子どもたちとの交流を通して体験的な「子ども理解」を促進するとともに、保育現場の日常的業務や保育者の仕事についての理解を深め、働くことの意義や責任について考えることが主な目的である。	共同
		保育実習Ⅰ(保育所)	保育所での実習(10日間)を通して、保育所の役割、保育士の職務、養護内容、子どもの実態、学校との連携や地域に果たす役割などを学ぶ。実習から、保育士として必要な知識、資質や能力、実践力を体験し、自己覚知を促すことが本科目の目的である。実習後に、達成できた課題あるいは残された課題を受け止められるように目的意識を持って実習に臨む。	共同
		保育実習Ⅰ(施設)	児童福祉施設での実習(10日間)を通して、施設の役割、施設職員の職務、養護内容、子どもの実態、学校との連携や地域に果たす役割などを学ぶ。実習から、保育士として必要な知識、資質や能力、実践力を体験し、自己覚知を促すことが本科目の目的である。実習後に、達成できた課題あるいは残された課題を受け止められるように目的意識を持って実習に臨む。	共同
		保育実習Ⅱ	保育実習Ⅰで学んだ保育所保育に関する基礎的知識のもとに、その実践力と応用力の向上をはかる。計画の立案、環境設定や必要な準備、計画と実践とのかかわりと相違点の実感、臨機応変な対応の必要性などを体験的に理解する。課題意識を持って実習に臨みながら、大学で学んだことと保育現場での実践をどう統合させていくかとともに、実習後の勉学における課題を見つける。	共同
		保育実習Ⅲ	保育実習Ⅰ(施設)で学んだ児童福祉施設に関する基礎的知識のもとに、その実践力と応用力の向上をはかる。計画の立案、環境設定や必要な準備、計画と実践とのかかわりと相違点の実感、臨機応変な対応の必要性などを体験的に理解する。課題意識を持って実習に臨みながら、大学で学んだことと施設での実践をどう統合させていくかとともに、実習後の勉学における課題を見つける。	共同
		保育実習指導Ⅰ	保育実習Ⅰの事前・事後指導にあたる科目である。保育実習の意義や目的を理解し、子どもの発達や個性に応じた指導計画の立て方や実践、保育記録や実習記録の書き方を学ぶ。さらに保育実習Ⅰの反省、自己評価をもとに自らの課題を明確にし、保育所実習Ⅱに向けて保育実践力を高める。	共同
		保育実習指導Ⅱ	保育実習Ⅱの事前・事後指導にあたる科目である。保育実習Ⅰの反省、自己評価をもとに、自らの課題を明確にし、実習を通してその実践力と応用力の向上が図れるように意識を持たせる。また、実習後の反省から、自身の保育者像を描き、以降の勉学における課題を明確にする。	共同
		保育実習指導Ⅲ	保育実習Ⅲの事前・事後指導にあたる科目である。保育実習Ⅰの反省、自己評価をもとに、自らの課題を明確にし、実習を通してその実践力と応用力の向上が図れるように意識を持たせる。また、実習後の反省から、自身の保育者像を描き、以降の勉学における課題を明確にする。	共同
		教育実習Ⅰ(幼)	教職課程(幼稚園)で修得した知識や技術、これまでに培った経験の蓄積、そして自身の教師観・教職観を全て活かして、実際の教師役割を担い、理論と実践を融合させ、教育実践者としての在り方を探究することを目的とする。見学実習や部分実習を通して、子どもとの関わりだけではなく、日々生起する諸課題に直面しても、指導教員の助言のもとで、主体的かつ積極的に問題解決を図れる意識と決意を持つことが重要である。教育実習生であっても子どもにとっては「先生」である。そのことを常に心に刻むとともに、2週間の実習先で出会う全ての人々に感謝して学びたい。	共同
		教育実習Ⅱ(幼)	「教育実習Ⅰ」に続く連続性を持った科目である。3年次後期の「教育実習Ⅰ」の経験を糧として、更に優れた教育実践者になるために主体的に取り組むことを期待したい。前回の実習で成長できた点や改善点を自己省察し、改善プログラムを検討した上で現場に赴き、責任実習などを通して子どもに寄り添いながら一人ひとりの成長を支援し、目前の課題に対して、より柔軟かつ的確に対応できる職業能力と適性を得ることを目的とする。	共同

専 門 科 目	実 習 関 連 科 目	教育実習指導Ⅰ（幼）	教育実習Ⅰとその事前・事後指導における、包括的なまとめをすることを目的とする。事前指導では、教育実習の意義と目的、実習受け入れ園の特色と事情、幼稚園教育要領等と保育内容の確認、指導案の作成方法、幼児理解、各種教育法等について学習する。教育実習の事後指導としては、実習先で部分実習などを通して各自が経験してきた教師役割(子どもとの関わり、協働性等)の共通理解を図るため、実習報告会や模擬保育による検討会を開催し、理想の幼児教育像の構築に向けて、学生と教員が共に検討し深め合う。	共同
		教育実習指導Ⅱ（幼）	教育実習Ⅱとその事前・事後指導における、包括的なまとめをすることを目的とする。事前指導では、教育実習の意義と目的、実習受け入れ園の特色と事情、幼稚園教育要領等と保育内容の確認、指導案の作成方法、幼児理解、各種教育法等について、教育実習Ⅰの経験をもとに再確認する。事後指導としては、実習先で責任実習などを通して各自が経験してきた教師役割(子どもとの関わり、協働性等)の共通理解を図るため、実習報告会や模擬保育による検討会を開催し、理想の幼児教育像の構築に向けて、学生と教員が共に検討し深め合う。	共同
		教育実習（小）	教職課程(小学校)で修得した知識や技術、これまでに培った経験の蓄積、そして自身の教師観・教職観を全て活かして、実際の小学校で教師役割を担い、理論と実践を融合させ、学校教育に携わる教育実践者としての在り方を探究することを目的とする。授業や教材研究(学習指導案の作成)、児童との関わりだけではなく、学校で日々生起する諸課題に直面しても、指導教員の助言のもとで、主体的かつ積極的に問題解決を図れる意識と決意を持つことが重要である。教育実習生であっても児童にとっては「先生」である。そのことを常に心に刻むとともに、実習先で出会う全ての人々に感謝して学びたい。	共同
		教育実習指導（小）	教育実習とその事前・事後指導における、包括的なまとめをすることを目的とする。事前指導では、教育実習の意義と目的、実習受け入れ校の特色と事情、学習指導要領と教科・教授内容の確認、学習指導案作成方法、児童理解、各種教育法等について学習する。教育実習の事後指導としては、実習先で各自が経験してきた教師役割(授業、児童との関わり、協働性等)の共通理解を図るため、実習報告会や模擬授業による検討会を開催し、理想の教育像の構築に向けて、学生と教員が共に検討し深め合う。	共同
		教育実習Ⅰ（中）	教職課程(中学校)で修得した知識や技術、これまでに培った経験の蓄積、そして自身の教師観・教職観を全て活かして、実際の中学校で教師役割を担い、理論と実践を融合させ、学校教育に携わる教育実践者としての在り方を探究することを目的とする。授業や教材研究(学習指導案の作成)だけではなく、学校で日々生起する諸課題に直面しても、指導教員の指導のもとで、主体的かつ積極的に問題解決を図れる意識と決意を持つことが重要である。教育実習生であっても生徒にとっては「先生」である。そのことを常に心に刻むとともに、実習先で出会う全ての人々に感謝して学びたい。	共同
		教育実習Ⅱ（中）	「教育実習Ⅰ(中)」を自己省察し、より発展的に捉え、卒業後に即戦力として学校現場で活躍できる人材になることを目的とする。授業実践の改善はもちろん、課外活動(クラブ・部活動)でも指導力を発揮し、指導教員の助言の下で、より具体的に日々の教師役割に触れ、自己の職能成長を促す契機とする。二度目の実習となれば、「慣れ」が油断を生むこともあるので、改めて初心を忘れず実習先で学ぶことに留意したい。	共同
		教育実習指導Ⅰ（中）	「教育実習Ⅰ(中)」とその事前・事後指導における、包括的なまとめをすることを目的とする。事前指導では、教育実習の意義と目的、実習受け入れ校の特色と事情、学習指導要領と教科・教授内容の確認、学習指導案作成方法、生徒理解、各種教育法等について学習する。教育実習の事後指導としては、実習先で各自が経験してきた教師役割(授業、生徒との関わり、協働性等)の共通理解を図るため、実習報告会や模擬授業による検討会を開催し、理想の教育像の構築に向けて、学生と教員が共に検討し深め合う。	共同
		教育実習指導Ⅱ（中）	「教育実習Ⅱ(中)」とその事前・事後指導における、包括的なまとめをすることを目的とする。事前指導では、「教育実習Ⅰ(中)」の省察プログラムを元にして、より優れた教育実践者になるための基礎素養を培う。事後指導では、二度にわたる教育実習の異同と成長の軌跡を報告するとともに、模擬授業を実施し討論会を開催する。これらの学びを通して、即戦力として学校現場で活躍できる人材になることを目指す。	共同

実習関連科目	保育・教職実践演習（幼）	この授業は教員・保育士養成課程4年間の「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。教員・保育者としての使命感や責任感を再確認するとともに、保育内容と子どもに対する深い理解に基づき、教育・保育現場における課題について理解し、対応する能力を身につける。各担当教員の演習課題に対して、学生自身が主体的に取り組むことを通して自己課題を見つけ、課題解決の方法を見出せるようにすることが期待される。具体的には、「子ども理解・子どもと関わる力」、「保育実践力」、「社会人として必要な社会性や対人関係能力」について演習を行う。この授業を通して、卒業後に教員・保育者としての生活を円滑にスタートできるような力を身につける。	共同
	教職実践演習（幼・小・中）	本演習は、教員養成課程の総まとめとして設定されたものである。教員には様々な資質・能力等が必要とされているが、本演習では特に次の5点を学生諸君の学びの対象とした。 ・社会人としてまた学校という組織の一員として必要な礼儀・常識の習得（各講義の受講態度指導及び講話等を通して）。 ・授業を構成したり指導したりするために必要な知識・技能の習得。（実習を重視） ・子どもたち一人ひとりに目を注ぎながら、学級づくりや集団づくりを進めていくのに必要な知識・技能の習得（実習重視）。 ・そうした個々の知識・技能の土台となる教師としての使命感の醸成。 ・コミュニケーション能力の育成（特にグループワークなどをできるだけ設ける）。	共同
	教育学基礎セミナーⅠ	自己の将来の進路について思考を深め、大学生活の残り2年間で、自身が成すべきことを見極めることを目的とする。教育の奥深さと、教育に係る多様な職業や社会的な貢献方法があることを理解し、適正吟味を図り、具体的な進路・将来像を設定するための手掛かりを探究する。学修形式は、少人数によるゼミスタイルであり、教育に関する知見を広く深く習得し、将来の教育者として、そして社会の担い手として活躍するための資質・能力・態度を涵養し、人間的に大きく成長する機会とも位置付ける。 (1. 多田孝志) グローバル時・多文化共生社会に対応した人間としての資質、能力についての認識を深める。多文化社会に重要なグローバル対話力の基本的考え方を知り、具体的な実践的技能を修得する。 (2. 米澤利明) 現代の学校教育におけるさまざまな課題について、その社会的視点、歴史的視点、経済的視点、政治的視点、文化的視点等さまざまな視点からの検討を通し、その課題解決に向かう道すじを探る中で自らの問題意識を明確にしながらい今後自らが取り組むべき研究分野を明らかにしていく。 (3. 笠間弘美) 英語教育、英米文学作品研究、異文化理解を中心に日本語または英語で書かれた文献を読み、教育に関する知見を広め、自己のキャリア形成に対する意識を高める。また、機会があれば地域連携事業に応募・参加協力し、地域活動と教育の関わりについて考える。 (4. 佐田東彰) 特別支援教育の分野には、どのような教育現場があるのか、そこではどのような人たちが働いているのか、どのような教育活動を展開しているのか、さらには、どのような子どもたちが学んでいるのかを講義、学生による調べ学習、外部講師の講話を通して理解する。また、次期学習指導要領は、どのような方向性で改訂されるかを学び、未来の教育者として必要な資質について理解する。 (7. 木村昭雄) 知識基盤社会を見据えて、「主体的・対話的で深い学び」を通して汎用性のある能力の育成を目指すための「社会に開かれた教育課程」とはどのようなものなのかを実践事例を通して明らかにし、直面している教育課程の課題について小集団での議論を重ね、今後自らが取り組むべき研究テーマを明らかにしていく。 (8. 塚崎玲子) 人間の多様性を描いたイギリス・アメリカの文学作品をできるだけ多く読み、人間性への関心を広げる。また、教育者として幼児・児童・生徒の内面を感知するのに必要不可欠な、人間の心の動きや人間性についての一般的な知識を身につける。 (10. 竹澤賢樹) 本演習では、2年間を通し、子どもの権利を尊重しながら、学び育つ機会を保障する子どもたちの福祉的支援について考える。具体的には、児童虐待、社会的養護、子どもの貧困、不登校、いじめなどの問題に対する支援について、さまざまな実践をもとに考察していく。セミナーⅠにおいては、前述の問題に関し、新聞記事やさまざまな資料を用いて、実態把握を行うとともに、発生要因や社会との関係性について分析をしていく。 (11. 村松麻里) 小学校英語や子どもの言語の学びに関する諸問題について様々な視点から検討・考察を行い、それらを通して研究の面白さ、研究手法の多様性を知るとともに、自らの卒業研究に向けた問題意識の明確化をはかる。自身のテーマに即した発表、受講生同士での議論を行い、考察を深めていく。	
専門科目	セミナー・卒業研究		

専門科目	セミナー・卒業研究	教育学基礎セミナーⅠ	(9. 米川（平石） 泉子） 確定された人間の本質規定から現実を理解するのではなく、具体的な人間の事実から不確定な人間の本質を問うという形で、人間の新たな経験や発見に即して全体的な人間の理解を作り出そうという努力である教育人間学的な視点をとおして、幼児教育、教育思想、絵本や幼年童話などについて学ぶ。 指定された図書を基に文献講読、発表、ディスカッションを基本にした形式で進める。基本文献の探し方、読み方、まとめ方とともに、基本的な研究方法について学ぶ。 (13. 小平豊彦) 自己の将来の進路について思考を深め、大学生活で自身が成すべきことを見極める。特にその中でも、小学校での体育の分野、保健的の分野、スポーツ科学分野の理論と実践を専門として学んでいく学生を対象とする。少人数のゼミの中で十分な意見交換や実践内容を検討する中で多様な考え方を身に付け、教育を担う者としての資質向上を図る。 (14. 山口真希) 次期学習指導要領で育むべき資質・能力、21世紀型スキル、情報活用力、社会人基礎力など、今後求められる人材や今日教育課題について検討する。 (15. 森舞) これまでの2年間の学びを元に幼児教育の表現分野及び初等音楽科教育について理論と実践を研究する。保育及び幼児教育の現場においての音楽表現の可能性を探るとともに、多様な音楽表現を実技演習やディスカッションを通して体感し、その楽しさや面白さを学生同士で共有することを目的とする。 (12. 奥泉敦司) 保育・幼児教育にまつわる諸問題を関連する保育・幼児教育の知識、知見とともに検討する。主には、テーマごとの文献精読を通じ、論文の形式の理解を図るとともに、自分自身の卒業研究テーマの興味関心を深めていくことを目的とする。特定の保育実践や技術がどのような保育学、幼児教育学の知見に基づいて構成されているのか、といった保育を支える価値観、哲学・思想等の理解に基づいた保育の理解ができるようになることを求める。ゼミの際は、各自持ち回りにて自身の卒業研究テーマに関する小発表を行う。 (16. 家崎萌) 美術、造形表現を中心に、実際に制作活動を行ったり多様な作品に触れたりしながら、美術教育の分野について実践を通して学ぶ。表現する行為や表現されたものによって生成する人間の学びについて、視覚的、造形的、歴史的、社会文化的等、多様な観点から知見を広げる。 (17. 枝元香菜子) 「卒業研究」に必要な基礎的な知識やスキルを習得することをねらいとし学習活動を行う。主に子どもの健康や発達・身体活動に関する様々な研究法の基礎を理解し、研究活動やディスカッションを通して、課題を発見し、課題を追及する方法を体得する。各自の卒業研究テーマ設定に向けて、興味・関心あることを深めていき、授業後半からは持ち回りで仮テーマでの小発表を行っていく。 (18. 松下（吉岡） 明日香) 卒業研究テーマを検討するために、文献、資料の精読を通して保育・幼児教育分野の現状と課題を把握する。興味関心のあるテーマについて掘り下げ知見を広める。また、基本的な研究の進め方についても学ぶ。	
		教育学基礎セミナーⅡ	ゼミ形式の学習を通して、教育学に関する基礎的な知識と、教育研究の種類や方法を習得することを目的とする。すなわち、学問領域としての教育学を学び、様々な研究方法を理解し、現代的な諸問題の要因と解決の糸口を解明するための資質・能力を養う。また、「教育学基礎セミナーⅠ」で探究した自分自身の目標や社会的使命を達成するために、どのような研究課題を設定すべきかを考察するとともに、自己の学びの軌跡や成果を、大学や社会にどう還元し、後輩にどう残し伝えていくのかも検討する機会とする。 (1. 多田孝志) 現代に子どもの教育に関する関心を高め、身体・精神的、また対人関係などについて、考察させる。子どもたちの現状を直視しつつ、健全な成長を支援するための教師の役割の役割について、認識を深めさせる。 (2. 米澤利明) 研究分野に即してさまざまな先行研究にあたりながら、教育研究の基盤となる、アンケート調査などの量的研究やエスノメソドロジーなどの質的研究の研究手法についての理解を深め、研究課題に適した研究方法を検討する。 (3. 笠間弘美) 習得した知識を今後の研究課題にどのように活用するかを考えながら、前期に引き続き関連の文献を読み進める。また、機会があれば地域連携事業に応募・参加協力し、地域活動と教育の関わりについて考える。 (4. 佐田東彰) 幅広く、教育学、教科教育学、教育心理学の領域における文献研究を行う。そして、各専門領域の最新の知見及び仮説検証の方法論を理解する。さらに論文や資料などの検索、収集からその批判的検討へといった文献研究の基本を習熟する。また主にシングルケース研究法を概説し、具体的な研究方法、妥当性、研究の限界について理解する。授業には、演習も取り入れ、シングルケースにおける基礎的な研究技法を学ぶ機会を設定する。	

専門科目	セミナー・卒業研究	教育学基礎セミナーⅡ	(7. 木村昭雄) 自らが取り組むべき研究テーマに関する先行研究の方法を理解したり、質的研究の方法としてのエスノグラフィーについての理解を深めたりする。「社会に開かれた教育課程」に焦点を当てて、その理論と実践の課題を読み解き、教育の歴史・思想・政策・実践という多角的な視点からも研究を深めていくことができることを理解する。 (8. 塚崎玲子) 前期に引き続き、人間の多様性を描いたイギリス・アメリカの文学作品をできるだけ多く読み、人間性についての関心を広げる。さらに人間の心の動きや人間性についての一般的な知識を身につけるとともに、多文化共生社会で生きる子供たちを育てる教育者としての立場から、一般的ではない心の動きについての描写にも注意を払い、人間性についての理解を深める。 (10. 竹澤賢樹) 本演習では、2年間を通し、子どもの人権を尊重しながら、学び育つ機会を保障する子どもたちの福祉の支援について考える。具体的には、児童虐待、社会的養護、子どもの貧困、不登校、いじめなどの問題に対する支援について、さまざまな実践をもとに考察していく。セミナーⅡにおいては、とくに各自が関心の高い問題に関する先行研究のレビューを行い、研究の出発点となる「問い」の確立を目指す。 (11. 村松麻里) 「教育学基礎セミナーⅠ」での学びを踏まえ、関連文献の調査等を行いながら、自身の研究テーマをより明確にしていく。様々な研究手法について理解を深め、それらを基に自身の研究の枠組みについて検討し、卒業論文の執筆に向けた計画を立案できるよう取り組みを進める。ひき続き、発表、討議を行いながら考察を深めていく。 (9. 米川（平石） 泉子) 確定された人間の本質規定から現実を理解するのではなく、具体的な人間の事実から不確定な人間の本質を問うという形で、人間の新たな経験や発見に即して全体的な人間の理解を作り出そうという努力である教育人間学的な視点をとおして、幼児教育、教育思想、絵本や幼年童話などについて学ぶ。 「教育学基礎セミナーⅠ」に引き続き、受講者は各自の興味関心を基に文献を探し、発表・ディスカッションをとおして卒業研究のテーマを絞っていく。文献購読をとおして、論文を書くにあたっての基本的な知識・方法を学ぶ。 (13. 小平豊彦) ゼミ形式の学習を通して、教育学全体の中の体育・保健・スポーツ科学などの分野の中から教育研究の種類や方法・実践に役立つことを習得することを目的として行う。また、教師の役割についても認識を深めさせる。 (14. 山口真希) 教育研究の基盤となる、研究として取り組みたいテーマを明らかにする。その際、問題の所在を明らかにするために背景、現状、課題を明らかにする。 (15. 森舞) 「教育学基礎セミナーⅠ」を元に幼児教育の表現分野及び初等音楽科教育について理論と実践を研究する。保育及び幼児教育の現場における音楽表現の可能性を探るとともに、多様な音楽表現を実技演習やディスカッションを通して体感し、その楽しさや面白さを学生同士で共有することを目的とする。 (12. 奥泉敦司) 「教育学基礎セミナーⅠ」での内容を踏まえて、各自の卒業研究テーマを深めていく。保育・幼児教育に関する学術論文等の通読を通して、自分自身の卒業研究テーマを絞り込み、確定させていく。また学術論文の通読を通して各種研究方法の理解とともに、実践研究等、実際の保育現場において必要な研究保育等の設計についても理解を深めていく。卒業論文の執筆に向け、研究計画を立てることができるようになることを目的とする。 (16. 家崎萌) 前期に続き、美術、造形表現を中心に、実際に制作活動を行ったり多様な作品に触れたりしながら、美術教育の分野における研究テーマを検討する。関連した先行研究等の文献講読、発表や議論、研究ポートフォリオ作成等を通して基本的な研究方法（主に質的研究）について学び、研究計画を立てる。 (17. 枝元香菜子) 前期の内容を踏まえて、各自の卒業研究テーマを深めていく。子どもの健康や発育発達・身体活動、自身の取り組んでいるスポーツに関する学術論文等の通読およびゼミでの討議を通じて、各自の卒業研究について、具体的な構想を検討することをねらいとする。前期までのゼミ研究活動をふまえ、研究の背景をおさえた上で明確な目的を設定し、その目的を達成するために適切な研究方法を検討することを目指す。 (18. 松下（吉岡） 明日香) 研究テーマを絞り、研究計画を立てることを目指す。テーマに係る背景、現状、課題を整理しながら、問題の全体像の把握に努めるとともに、研究方法を検討することを通して研究の枠組みを明確にしていく。	
------	-----------	------------	--	--

専門科目	セミナー・卒業研究	教育学セミナーⅠ	各自が卒業研究に向けて、自己の課題を確定・明確化し、研究計画を立案することを目的とする。受講生一人ひとりの研究関心に応じた先行研究や各種文献を持ち寄って報告し、その過程の中で指導教員の助言や学友の多様な見解、先人の智慧を知り、乳児・幼児・児童・生徒、保育・幼児教育、学校、教育についての認識を深めていくことで、教育学研究者としての自己を構築し高めていく。同時に、研究上の基本的作法や心構えも学習し、研究倫理や法的権限を深く理解して、研究者としての矜持を携えることを目標とする。 (1. 多田孝志) 現代の教育に関わる課題について、現状のさまざまな問題、未来を指向し、持続可能な社会を形成するためになるべき事項等を考察させ、調査・分析し、自己見解や提言を述べる活動を体験させる。こうした学習体験を通して、21世紀型能力の伸張を目指させる。 (2. 米澤利明) 研究テーマを明確にして、研究計画を立案する。自らのテーマについての先行研究を収集し、互いに検討する。研究論文の構成や研究方法、併せてデータ収集の方法等を明らかにする。 (3. 笠間弘美) 先行研究の収集・分析を踏まえ、英語教育、英米文学作品研究、異文化理解を中心に各自の興味ある分野と教育をどのように結び付けられるかを考えながら卒業研究の土台を築く。 (4. 佐田東彰) 自分の研究したい分野において、先行研究をレビューし、まだ未解決な論点を明確にする。その論点を検証できる仮説をつくり、研究デザインを作成する。そして、ゼミの討議により、研究の目的、目的の検証可能性、研究の方法の妥当性につき、集団討議を通し、深く理解する。 (7. 木村昭雄) これまでの授業やゼミで学んだこと、自分で取り組んできた先行研究を基に、自らの研究テーマを明らかにし、研究計画を立案し、論文構成も具体的に作成する。 (8. 塚崎玲子) これまで読んだ作品の中から最も印象に残った作家または作品を選び、教育に携わる者としての立場を踏まえ、様々な方向から考察を重ねて研究テーマとしてふさわしい課題を見つけ出す。将来子どもたちの個性に合った読書指導ができるよう、図書館を積極的に利用し、分野を超えた関連資料の収集に努める。 (10. 竹澤賢樹) 本演習では、2年間を通して、子どもの権利を尊重しながら、学び育つ機会を保障する子どもたちの福祉の支援について考える。具体的には、児童虐待、社会的養護、子どもの貧困、不登校、いじめなどの問題に対する支援について、さまざまな実践をもとに考察していく。教育学セミナーⅠにおいては、教育学基礎セミナーⅡで立てた「問い」に対する研究デザインの確立を行う。 (11. 村松麻里) 受講者それぞれの研究に関連した文献の調査・検討を通してテーマを明確化し、研究計画の立案を行う。論文の形式、先行研究の検討、研究方法（データ収集、分析）といった論文作成の基礎知識を学ぶとともに、仲間同士での進捗報告や発表、討議を行いながら自身の研究を深める。 (9. 米川（平石）泉子) 確定された人間の本質規定から現実を理解するのではなく、具体的な人間の事実から不確定な人間の本質を問うという形で、人間の新たな経験や発見に即して全体的な人間の理解を作り出そうという努力である教育人間学的な視点をとおして、幼児教育、教育思想、絵本や幼年童話などについて学ぶ。 受講者一人ひとりが卒業研究のテーマに沿った文献をまとめ、発表し、受講者とのディスカッションをとおして研究を深めていく。 また同時に、論文を書くにあたっての基本的な知識・方法を学ぶ。 (13. 小平豊彦) 1人ひとりが充実した卒業研究を完成することができるよう、論文の形式、先行研究、データ収集と分析をしっかりと学んで研究を進めていく。また、仲間と意見を交換しながら必要に応じて見直し研究を進める。 (14. 山口真希) 研究は、今までの研究成果の上に積み上げる作業である。そのための先行研究を収集し、互いに検討する。 (15. 森舞) 「教育学基礎セミナーⅠ、Ⅱ」を元に幼児教育の表現分野及び初等音楽科教育について理論と実践を研究し理解を深める。保育及び幼児教育の現場と小学校においての音楽表現の可能性を探るとともに、多様な音楽表現を実技演習やディスカッションを通して体感し、アンサンブル演習から音楽の楽しさや面白さを体感する。さらに実践への活用方法を探るとともに、卒業論文のテーマを模索する。
------	-----------	----------	---

専 門 科 目	セ ミ ナ ー ・ 卒 業 研 究	教育学セミナーⅠ	(12. 奥泉敦司) 3年次までの「教育学基礎セミナーⅠ・Ⅱ」での内容を踏まえて、自分自身の卒業研究テーマに関する概要をまとめ、必要な調査の設計を行い、実施する。卒業研究テーマごとの先行研究の整理を行い、論文執筆を行っていく。具体的には、卒業論文の章立ての検討を行い、論文全体の構成することを目的とする。その過程にて必要な文献の検討や調査の必要性の有無等を各自の発表を通して検討していく。 (16. 家崎萌) 制作等の実践の進捗と先行研究の資料とその検討を研究ポートフォリオに蓄積しながら研究テーマを明確化させる。少人数での研究の進捗の発表と議論を通して、探究を深める。卒業論文執筆に向けた討議や実践と並行し、作品の展示についても基礎的な知識を学ぶ。 (17. 枝元香菜子) 3年次に立てた計画・内容に沿って、データを収集していくことで卒業研究の円滑な履修を目指す。児童教育や体育・スポーツ・健康関係に関する研究を遂行しながら、各自の設定した研究課題に関する資料収集・調査等を進め、研究活動の基盤をつくることを授業のねらいとする。 また、ゼミ活動を通して将来も付き合っていくことができる仲間意識を育てるとともに、積極的に協働する態度を育成する。 (18. 松下(吉岡) 明日香) 卒業研究論文の構成を検討し、各章の執筆に取り掛かる。また、研究計画に基づいて、必要な調査を実施する。学生間で研究の計画および進捗状況を発表し、意見交換を通して研究の軌道修正をしながら研究を進めていく。	
		教育学セミナーⅡ	教育学基礎セミナーⅠ・Ⅱおよび教育学セミナーⅠまでの知識の蓄積を踏まえ、自己の研究課題の充実に向け計画に沿って具体的に進捗し、これを完成させることを目的とする。論文執筆に係る資料の収集や選択、分析・考察方法や活用・援用の実際などを、個別指導を受けて能動的に習熟する。文献調査、質的調査(フィールドワークや会話分析等)、量的調査(統計的傾向の導出)を対立させるのではなく、それぞれの特質や知見を有機的に融合させて多角的・多層的に現象を解明し、教育研究者としての自己を確立する。 (1. 多田孝志) 小論文作成の方法を修得させる。作成の目的、テーマの設定、調査、調査結果の分析、構想づくり、論述と推敲等、具体的方途を修得させる。相互批評の機会を設定し、仲間と共に学び、高次な知的世界を探究する愉悅を感じさせる。学習指導要領で重視されている、深い思考・対話力の育成を重視し、グループでの課題についての論議、また事象の要因や解決方法について多様な視点から検討し、深く考えていく能力を高めていく。 (2. 米澤利明) これまでの教育学基礎セミナーⅠ・Ⅱおよび教育学セミナーⅠまでの知識の蓄積を踏まえて、論文を完成させる。セミナーの仲間と研究内容について積極的に議論や対話を重ね、研究の意義や発展性を確認する。さらに、今後、教育者となった時の生き方との関わり、学び続けることの重要性についての認識を深める。 (3. 笠間弘美) これまでに習得した学習スキルを活かし、収集した研究資料の分析・考察をしながら、卒業研究の完成に向けて具体的に取り組む。完成までの間は、セミナーの仲間同士で進捗状況を確認し合い、中間発表を通して内容について意見交換をして、各自の研究活動につなげる。 (4. 佐田東彰) 各ゼミ生が、教育学基礎セミナーⅠ・Ⅱおよび教育学セミナーⅠで完成した研究デザインに従って、実際のデータ集積を行う。具体的には、教育現場での実践的な研究、実験心理の技法を使用した研究、アンケートによる量的・質的な研究等を行う。そして、持ち寄ったデータの結果をまとめ、考察を行う。その際、ゼミによる集団討議を行い、研究の妥当性を高める授業を行う。 (7. 木村昭雄) 先行研究によって明らかになってきた課題、これまで収集してきた実践事例やこれらに関するインタビュー等を整理、分析しながら考察を深め、論文を完成させていく。併せて、学校を基礎にして「教育課程」を編成する力量を身に付ける大切さと、子どもたちの未来を切り開いていく教師となる自覚をもたせる。 (8. 塚崎玲子) 研究課題の完成に向けて、研究対象として自分が選んだ作家または作品について、これまでに収集した関連資料の整理と分析をし、考察を重ねて論文にまとめる。常に学校教育の現場で子どもの指導に応用できるよう心構えて研究対象に向き合い、客観性を見失わず、論理的な書き方ができるように努める。 (10. 竹澤賢樹) 本演習では、2年間を通し、子どもの権利を尊重しながら、学び育つ機会を保障する子どもたちの福祉の支援について考える。具体的には、児童虐待、社会的養護、子どもの貧困、不登校、いじめなどの問題に対する支援について、さまざまな実践をもとに考察していく。教育学セミナーⅡにおいては、教育学セミナーⅠで立案した研究デザインにもとづいて論文の執筆を行う。	

専門科目	セミナー・卒業研究	教育学セミナーⅡ	(11. 村松麻里) 自身がこれまでに深めてきたテーマを第三者にとって説得力ある研究成果として提示できるよう、論文の形式と内容とを精査し、推敲を重ね、論文を完成させる。進捗報告、発表、討議を随時行いながら思考を深めていく。 (9. 米川（平石） 泉子) 確定された人間の本質規定から現実を理解するのではなく、具体的な人間の事実から不確定な人間の本質を問うという形で、人間の新たな経験や発見に即して全体的な人間の理解を作り出そうという努力である教育人間学的な視点をとおして、幼児教育、教育思想、絵本や幼年童話などについて学ぶ。 各自が卒業研究を深めていく。研究内容を発表し、受講者とのディスカッションをとおして批判的思考を学ぶ。 (13. 小平豊彦) 卒業研究の完成に向け、データの整理及び論文執筆に力を注ぐ。各自の論文をゼミにて読み合い、修正を重ねて論文が完成となるように検討を行っていく。またその過程の中で学校現場を想定し役立つように推敲を行い、教育研究者としての技能を向上・習得する。 (14. 山口真希) 論文の根拠となるデータ分析の基礎的な知識と技能を身に付ける。特に教育現場で多用されるT検定、分散分析を中心に行う。また教育現場でのインタビューの方法も身に付ける。 (15. 森舞) 「教育学セミナーⅠ」を元に幼児教育の表現分野及び初等音楽科教育について理論と実践を研究し理解を深める。保育及び幼児教育の現場と小学校における音楽表現の可能性を探るとともに、多様な音楽表現を実技演習やディスカッションを通して体感し、アンサンブル演習から音楽の楽しさや面白さを体感する。さらに実践への活用方法を探るとともに、卒業論文のテーマを決定する。 (12. 奥泉敦司) 卒業研究の完成に向け、データの整理および論文執筆に注力する。 各自が執筆した論文本体をゼミにて読み、部分ごとに推敲を重ねていく。各自の論文執筆が完成に向かうよう、執筆した文章に関しては、随時ゼミ内にて検討を行っていく。 (16. 家崎萌) 造形表現、美術教育に関するテーマに基づく卒業論文及び制作の発表に向け、ゼミ内で企画を討議し、展示会や発表会を運営する。美術教育の分野における実践力として、制作から展示までに必要な一連の知識や技能の習得や、他者と共同して創造的に企画運営するマネジメントの技能も身につける。 (17. 枝元香菜子) 自己の研究テーマに沿って、アンケートやインタビュー、ゲームスコアなどの前期までに収集したデータの整理・分析を行い、卒業論文の完成を目指す。データの分析結果や考察について、ゼミ内で議論を重ねながら検討を行っていく。毎時間、それぞれの進捗状況を発表をしていくことで、完成度を高めていく。 (18. 松下（吉岡） 明日香) 実施した調査結果を考察し、研究成果としてまとめる。学生間で研究の進捗発表を行い、互いに意見交換する。卒業研究の総仕上げとして論文完成に向けて各章ごとに検討、推敲を重ねていく。	卒業研究
------	-----------	----------	--	------

専門科目	セミナー・卒業研究	卒業研究	(3. 笠間弘美) 英語教育、英米文学作品研究、異文化理解を中心に各自の興味ある分野からテーマを選び、先行研究の収集・分析を踏まえ、卒業研究に取り組む。 (4. 佐田東彰) 主として個別指導により行う。論文作成を通し、学生が自らが設定した研究課題を自発的・主体的に探究する態度を養う。さらに論文作成を通し、論理性、文章表現力、引用文献のセオリー、研究の倫理性などにつき理解する。また、構想発表会、中間発表会、審査発表会を設定し、説明する能力や討議する能力を培う。 (7. 木村昭雄) これまで取り組んできた研究の成果とまとめ方について発表したり、相互評価したりすることを繰り返し、互いに学び合いながら卒業論文を完成させる。卒業研究を通して「学び続ける教師」の重要性を体験的に理解し、目指すべき自らの教師像を明らかにする。 (8. 塚崎玲子) 研究指導分野は英語による作家・作品研究である。卒業論文完成を目指し、各自で研究したいテーマを決め、「研究ノート」を作成する。「研究ノート」に研究課題に関係するすべての情報や、自らの度重ねた考察を書き込みながら論文執筆作業を進め、深い学びが実感できるようにする。 (10. 竹澤賢樹) 子どもが成長する環境において、その子らしい育ちが保障されない場合、子ども自身や家庭あるいは学校への支援が必要となる。本演習では、子どもの人権を尊重し、学び育つ機会を保障する子どもたちの福祉的支援について考える。具体的には、児童虐待、社会的養護、子どもの貧困、不登校、いじめなどの問題に対する支援について、さまざまな実践をもとに考察していく。最終的には、卒業論文の執筆を通して、健やかな子どもの成長・発達が可能となる社会への貢献を目指していく。 (11. 村松麻里) 小学校英語、子どもの言語の学びに関する理解を深め、卒業論文を完成させる。自身が選び、定めたテーマを、所定の形式を踏まえて客観的に論じ証明していく経験は、将来、社会に出てからも役立つはずである。研究の基礎を踏まえ、独創的な視点と地道な作業の積み重ねを大事にし、真摯に研究を進めることを期待する。 (9. 米川（平石）泉子) 確定された人間の本質規定から現実を理解するのではなく、具体的な人間の事実から不確定な人間の本質を問うという形で、人間の新たな経験や発見に即して全体的な人間の理解を作り出そうという努力である教育人間学的な視点をとおして、幼児教育、教育思想、絵本や幼年童話などについての論文を執筆する。受講者各自の興味関心を基に、主体的に学びを深め、基本的な研究方法・技術を取得し、テーマに沿って研究する。 (13. 小平豊彦) 卒業論文の完成を目指して、ゼミとしてお互いに相互評価を繰り返し、わかりやすい論文を書くために改善を行う。卒論発表まで互いに高め合う姿勢を身に付けるとともに、教員として必要な資質を高める。そして、学校現場で健やかな子どもの成長発達に寄与でき社会への貢献を目指す。 (14. 山口真希) 卒業論文の完成までゼミとしてお互いに相互評価を繰り返し、他者にわかりやすい論文を書くために常に改善を行う。最終的な卒論発表まで、学び合い認め合い、互いに高め合う姿勢を身に付けることも教員養成課程として必要な資質ととらえる。 (15. 森舞) 音楽を通じた表現活動の理論と実践の研究の集大成として、各自のテーマを論文にまとめ推敲し発表する。論文をまとめるにあたりそれぞれに積極的な意見交換や実技演習の機会を設け、客観的および論理的な論文の作成を目指す。 (12. 奥泉教司) 保育・幼児教育を取り巻く多様な価値観を理解することを目的として、これまでの幼児教育実践、保育実践を支える教育思想や哲学に関する理解を深める。一つの実践の背景にある特定の思想、宗教、哲学等を一つの価値観、考え方として理解することを通じて、現代を生きる保育者、教育者、一個人として多様性を認めることができるようになることを期待する。ゼミでの検討は文献や映像資料を通じた保育実践の解釈を中心に行う。またゼミでは各自に積極的な発表機会を設ける。 (16. 家崎萌) 自身が選んだ造形表現、美術教育に関するテーマに基づき、収集したデータの整理と分析、考察に基づく卒業論文執筆と、制作実践を主体的に行い、表現する行為や表現されたものによって生成する人間の学びについて探究する。個別指導を中心に、卒業研究の成果発表、論文完成へ向け、推敲を重ねる。 (17. 枝元香菜子) 専門とするスポーツの問題点や課題、また健全な成長や健康で豊かな生活を送るために必要不可欠である運動や食事に焦点を当て、学生自らが興味・関心に沿った学術的、社会的に重要な研究テーマを見出す。ゼミ内での議論を通し、論理的思考に基づいてその問題を解決するための能力を身に付けると同時に多様な見方・考え方を学ぶ。テーマの設定から卒業論文の執筆、発表までやり切ることで、研究する姿勢の習得や指導者としての成長を目指す。
------	-----------	------	---

		(18. 松下（吉岡）明日香） 卒業研究を通して、思考力と表現力を養い、学び続ける保育者・教育者としての素地を身に付けることを目指す。保育・幼児教育分野から関心のある事象を取り上げ、基本的な研究方法を学びながら論文を執筆する。	
--	--	---	--

学校法人金沢学院大学 組織の移行表

令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和4年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
金沢学院大学				金沢学院大学				
	3年次				3年次			
文学部	<u>250</u>	<u>13</u>	<u>1,026</u>	文学部	<u>180</u>	<u>8</u>	<u>736</u>	
文学科	180	8	736	文学科	180	8	736	
教育学科	<u>70</u>	<u>5</u>	<u>290</u>	教育学科	<u>0</u>	<u>0</u>	<u>0</u>	令和4年4月 学生募集停止
				教育学部	<u>70</u>	<u>5</u>	<u>290</u>	学部の設置(届出設置)
				教育学科	<u>70</u>	<u>5</u>	<u>290</u>	学科の設置(届出設置)
	3年次				3年次			
経済学部	140	10	580	経済学部	140	10	580	
経済学科	80	5	330	経済学科	80	5	330	
経営学科	60	5	250	経営学科	60	5	250	
	3年次				3年次			
経済情報学部	70	-	280	経済情報学部	70	-	280	
経済情報学科	70	-	280	経済情報学科	70	-	280	
	3年次				3年次			
芸術学部	70	2	284	芸術学部	70	2	284	
芸術学科	70	2	284	芸術学科	70	2	284	
	3年次				3年次			
スポーツ科学部	150	10	620	スポーツ科学部	150	10	620	
スポーツ科学科	150	10	620	スポーツ科学科	150	10	620	
	3年次				3年次			
栄養学部	80	5	330	栄養学部	80	5	330	
栄養学科	80	5	330	栄養学科	80	5	330	
大学計	760	40	3,120	大学計	760	40	3,120	
金沢学院大学大学院				金沢学院大学大学院				
経営情報学研究科	14	-	32	経営情報学研究科	14	-	32	
人文学研究科	5	-	10	人文学研究科	5	-	10	
スポーツ健康学研究科	5	-	10	スポーツ健康学研究科	5	-	10	
大学院計	24	-	52	大学院計	24	-	52	
金沢学院短期大学				金沢学院短期大学				
食物栄養学科	60	-	120	食物栄養学科	60	-	120	
現代教養学科	50	-	100	現代教養学科	50	-	100	
幼児教育学科	50	-	100	幼児教育学科	50	-	100	
短期大学計	160	-	320	短期大学計	160	-	320	